



ミュージアム・マネージメント・フォーラム2003 21世紀型ミュージアム・マネージメントの創造

目 次

【特 集】

- 特別事業「ミュージアム・マネージメント・フォーラム2003」を開催して JMMA会長（常磐大学学長）大堀 哲2
特別事業「ミュージアム・マネージメント・フォーラム2003」まとめにかえて 特別事業実行委員会3
基調講演「ヨーロッパにおける博物館研究の動向と今後のミュージアム・マネージメントの方向性（要旨）」
ラインワルト・アカデミー教授 ピーター・ファン・メンシュ
（日本語要旨文責 高橋信裕）5

【論考・提言・実践報告】

- 町内作家が運営する井波美術館物語
「テーマ」としての遊廓
井波美術協会会長／井波美術館理事長 長谷川総一郎9
株式会社 乃村工藝社 田上 仁志14

【研究部会報告】

- 制度問題研究部会第2回研究会 大妻女子大学 小原 巖16
ソフトサービス研究部会第2・3回研究会 幹事 塚原 正彦19
平成15年度（2003）における研究部会・支部会報告22

【新刊紹介】

- 「一地域博物館学の提唱—博物館学入門」 JMMA事務局 高橋 信裕23
「ミュージアムが都市を再生する—経営と評価の実践」 原 秀太郎24

【掲示板】25

【インフォメーション】27

特集

去る12月7日に開催されましたミュージアム・マネージメント・フォーラム「21世紀型 ミュージアム・マネージメントの創造—ミュージアム・マネージメント学の確立のために—」の内容等の特集してご報告申し上げます。

特別事業「ミュージアム・マネージメント・フォーラム2003」を開催して

JMMA会長（常磐大学学長）大堀 哲

平成7年3月に日本ミュージアム・マネージメント学会（JMMA）が創設されて、はや10年目に入りました。創設当時からみると博物館を取り巻く環境は大きく変化し、マネージメントの視点を欠いた博物館の変革は考えられないことが多くの関係者の共通認識になってきているといえましょう。本学会はいち早く博物館におけるマネージメントの重要性に注目し、7つの研究部会を設置して実践活動を踏まえつつ、地道な研究活動を続けて参りました。その成果は会報や研究紀要に発表されたり、年大会での研究協議等を通じてより深められ、積み重ねられてきました。しかし、本学会活動のさらなる発展を図る観点から、予算や時間的制約などのために研究部会では取り上げにくいものや、会員個々の実践、又は研究活動を支援するため、特定のテーマについて集中的に研究・協議する場を設定することの必要性が提案され、2001年から「特別事業」としてJMMAと文化環境研究所の共催により実施して参りました。第1回のフランス文化省博物館監察官イザベル・バルザモ氏、第2回のイギリスのレスター大学博物館学部アイリーン・フーパー・グリーンヒル教授に続いて、今回はオランダのラインワルト・アカデミー教授ピーター・ファン・メンシュ氏をお招きし、ミュージアム・マネージメントに関わる国際的な動向をうかがったり、意見交換をする機会をつくるとともに、特定テーマについて会員による事例発表やシンポジウムを開催したのもそうした理由によるものがあります。

このたびの第3回（平成15年12月7日）の特別事業は、本学会が創立10周年を機に学会の将来の活動方向を各方面から検討し、学術研究団体としての基盤を確立するなど、さらなる発展を期するために平成14年に立ち上げた「学会将来構想検討委員会」の中間報告や、10周年記念事業の一環として進めている「ミュージアム・マネージメント事典」編集企画の中で提起されている「ミュージアム・マネージメント学の確立」「会員に提供すべきサービスの内容」等を検討する議論と極めて深くかかわるものだけに、参加者の関心も大きかったように思います。

本来ミュージアム・マネージメント学は、社会的存在としての博物館活動のよりよい実現、より効果的な博物館経営の改善に結びつくことを目的とする学問であり、利用者の視点に立って博物館運営を考

え、時代に即したものにしていけることが本学会に一層求められていると考えております。

今回の特別事業は「21世紀型ミュージアム・マネージメントの創造」をテーマとしたフォーラムでありましたが、メンシュ教授の基調講演において、いくつか注目すべき指摘がありました。とくに私は「組織の変化」について言及された点に強い関心を持ちました。つまり博物館が、いまコレクションベースではなく、機能ベースの組織になってきているという点です。オランダでは、職員の80%までがキュレーター以外のニュープロフェッショナルといわれる専門職（プロフェッション）がみられるという指摘であります。キュレーターとともに、エドゥケーター、アーティスト、レジストラ、展示デザイナー、ドキュメンタリスト、保存技術者、舞台設計専門家、キャプションを書く人などの専門家が必要であり、その博物館のミッションを達成する観点から多様な異なる専門知識をもつ人々によるプロジェクト組織をつくり、クリエイティブで効果的な力を発揮するようにすることが大切だという考え方は共感できるものでした。キュレーターが博物館活動のすべてではありえないことであり、様々な異なった専門家を養成していくことはこれからのミュージアムの課題であることは間違いありません。

もう一つは、テーマパークのような施設が増えてきて博物館ビジターが増加していないレジャー活動の枠組みの中で、ミュージアムの新しい位置づけが必要であり、ビジターにいかなるものを提供していくか、そしてミュージアムのユニーク性は何かを考えていくことが必要だという、格別新しい意見ではないようにみえて、しかし重要な発言であったと思います。それに関してエコノミー、エクスペリアンス、実物の提供とそのためのファシリティ（施設）の開発の必要性を説いておられたことは深く考える必要があるようです。

午後に行われたパネルディスカッションは、“コミュニケーション”をめぐるその役割や技法、プロフェッショナリズム、高度情報化社会などとの関連について、コーディネーターのもと5人のパネラーが貴重な議論を展開されましたし、会場の参加者からの質問や意見も積極的に出され、充実した時間を過ごすことができたのではないかと考えます。

ここでも博物館のプロフェッショナルの問題が強調されたように思います。博物館のサービス、コミュニケーション、エドゥケーションにはアーティスト、キュレーターなどのコラボレーションが必要ではないか、という質問をめぐる、メンシュ教授から博物館はコミュニケーションを図るべきであること、教育的でなければならないこと、人々が期待していないことを引き出す教育、コミュニケーション

が重要であると指摘されたことが印象に残りました。また、博物館の組織変革について、それは博物館の内部から出てきたものか、それとも外部社会からの要請によるものかをめぐって議論されたことも有意義だったと思います。これはパネラーからも指摘されましたが、社会的存在としての博物館が社会とコミュニケーションしていくことの重要性を考えれば社会からの要請、社会に対するアカウンタビリティを無視することはあり得ないし、一方で博物館内部のコミュニケーションを緊密に図りつつ、利用者の声、ニーズを吸い上げたマネジメントをしていかなければならないといった議論は当然のことといえましょう。

いずれにしても、このフォーラムが回を重ねるごとに内容の充実が図られ、本学会の事業の大きな柱の一つになってきていることは喜ばしいことであり、実行委員会委員の献身的な努力に対して会員の皆様とともに深く感謝したいと思います。次回にはさらに一層充実したプログラムが企画されることを願ってごあいさついたします。

特別事業「ミュージアム・マネジメント・フォーラム2003」まとめにかえて

特別事業実行委員会

1. はじめに

今回のフォーラムに対して、充実した発表と予想を上回る参加者が実現され、無事終えることができましたことに、改めてお礼を申し上げます。

この様な国際的なフォーラムを日本ミュージアム・マネジメント学会において実施することができたことは、学会にとってたいへん意義深いことであると感じております。今後も、学会の主要事業の一つとして、継続的に行っていきたいと考えております。

今回のテーマとして掲げた「21世紀型ミュージアム・マネジメントの創造」は、博物館経営論研究の進展に対応した、学会が取り組むべき大きな課題の一つであります。

開催までの経緯を簡単に振り返ってみたいと思います。

2. 経緯

我が国のミュージアムを取りまく環境が厳しさを増すなか、NPOや民間への管理委託等の新たな動きも始まっています。これまでの「資料の保存と活用を中心とした博物館活動」から、より幅広い社会的な活動へと視野を広げるミュージアムが誕生しつつあります。

ミュージアム・マネジメントの考えが我が国に紹介されて約10年。当然のことながら、海外の理論

や技術をそのまま導入してきたのではなく、それらを参考にしつつも、我が国の今日的な状況に即したマネジメント理論や技術が模索されてきたといえましょう。

本フォーラムは、こうした社会背景のもと、昨年の「ミュージアム・コミュニケーション」に引き続いて実施されたものですが、今回は日本ミュージアム・マネジメント学会の将来構想委員会の検討テーマのひとつである「ミュージアム・マネジメント学の学問領域」を検討する議論から、企画が始まりました。

そういった経緯から、今回のフォーラムは、ミュージアム・マネジメント学会の課題でもある「学問領域の確立」に資するものと位置づけ、10年以上前から「理論博物館学」を提案しているオランダ・ラインワルト・アカデミーのピーター・ファン・メンシュ教授をお招きすることとなりました。

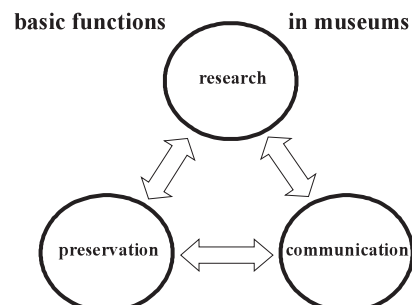
構成としては、まず、教授にオランダにおける博物館学の体系と基本的な理論を紹介してもらうことで、議論の枠組みを提示し、それを受けるかたちで、国内各地域の学会員による「21世紀型ミュージアム・マネジメントへの提言」を行い、ミュージアム・マネジメントの在り方を考えることとしました。

2003年6月に特別事業実行委員会を設置してから、毎月1～2回程度の会合を行ってきましたが、これまでの特別事業実行委員会と同様に、テーマに関する勉強会も実施することは、この実行委員会の特徴となっています。

3. まとめ

ピーター・ファン・メンシュ教授によれば、博物館研究は、大きく「理論編theoretical museology」と「応用編applied museology」に分けることができ、その基礎として「歴史研究」や「技術編」、「特論」（特定のテーマに基づく言及）等が位置づけられています。また、博物館の機能は、input機能とoutput機能の二つの側面から捉えることができるとし、ミュージアムは、「research」「preservation」「communication」の3つの基本機能によって構成されるとしています。

この「communication」を他の「research」「preservation」と同列の独立機能と位置づける考え



方は、1970年代頃から、ヨーロッパの各博物館で教育普及部門を独立させた組織づくりが活発に行われるようになってきたとことに、大きく反映されており、この頃から博物館事業の中心が教育活動に移っていったことが紹介されました。

これらの考え方は、昨年の基調講演を行ったレスター大学のアイリーン・フーパーグリーンヒル教授によっても「博物館の基本的な運営構造」として提案されています。

これらの枠組みに加えて、我が国の発表者からは、「21世紀型ミュージアム・マネージメントへの提言」として、

- ①21世紀型ミュージアム・マネージメントの技法
高安礼士氏（千葉県総合教育センター）
- ②ミュージアムのプロフェッショナルリズム
中島宏一氏（財団法人 北海道開拓の村）
- ③高度情報社会とミュージアム
田窪直規氏（近畿大学短期大学部）
- ④21世紀型博物館のコミュニケーション
布谷知夫氏（滋賀県立琵琶湖博物館）

等の提案が行われました。

今回のフォーラムを通じて、ミュージアム・マネージメントに関する議論における、いくつかの基本的な問題が明らかになったのではないかと考えています。それは、

- ミュージアム・マネージメントの対象・方法は社会の変化に伴って変化する
- 21世紀型ミュージアム・マネージメントの中心は博物館教育（コミュニケーション）である
- 高度情報社会はミュージアム・マネージメントを根本的に変える
- 21世紀型博物館のコミュニケーションは利用者が作る

等であり、21世紀のミュージアム・マネージメントを考える時に参考となるものと思われます。

昨年のフォーラムのテーマである「ミュージアム・コミュニケーション」の協議の中でも、「博物館に歓迎されていると感じていない人々」や「使いにくさを感じている人々」の存在の理由を「一方通行のコミュニケーションである19世紀型博物館」の運営理念に原因があるとされ、「コミュニケーション」がこれからのミュージアム・マネージメントの中心的テーマとなることが示唆されました。

今回のフォーラムのサブ・テーマである「ミュージアム・マネージメント学の確立」は当学会の活動テーマである「ミュージアム・コミュニケーション」と深い関係があります。今回の特別事業をきっかけとして、さまざまな取り組みや議論の展開が行われることを期待いたします。

実行委員会

今回の特別事業は、理事会の承認を受け学会事業として「実行委員会」を設置して、準備・実施いたしました。6月から準備を進め、毎月1～2回の実行委員会を開催し、「21世紀型ミュージアム・マネージメントの創造」についての研究会や運営準備を行ってきました。

実行委員長	理事	川津尚一郎
実行副委員長	理事	高安礼士
実行委員	事務局長	高橋信裕
実行委員		牛島薫
実行委員		小川義和
実行委員		亀井修
実行委員		竹内有里
実行委員		中野雅之
実行委員		水嶋英治
実行委員		山本哲也
実行委員	事務局	齊藤恵理

基調講演

「ヨーロッパにおける博物館研究の動向
と今後のミュージアム・マネージメント
の方向性」(要旨)

ラインワルト・アカデミー教授

ピーター・ファン・メンシュ

(日本語要旨文責 高橋信裕)

ラインワルト・アカデミーの名称は、オランダの博物館学者であるキャスパー・ラインワルトの名前に由来している。ラインワルトは、日本でも有名なシーボルトの友人であり、シーボルトが持ち帰った日本のコレクションは、ラインワルトの協力があった政府が購入し、現在の国立博物館の形になったものである。

この講演では、博物館学と博物館管理のつながりを系統的にアプローチしていきたい。

博物館学は、社会にとって博物館がどのようにあるべきかを規定し、組織的、手続き的な構造を特定の形で定義し明らかにするものである。

(図1)は、博物館の業務を理論的に取り上げ、かつトレーニング等について、その関係性を明らかにしたもので、1983年のICOFOMの会議でポーランドの博物館学者・グルチンスキーが提唱した。三角形の頂点には、博物館学(MUSEOLOGY)の理論があり、底辺の両端にトレーニングと博物館業務が位置付けられる。理論とトレーニングとの間には、

図1

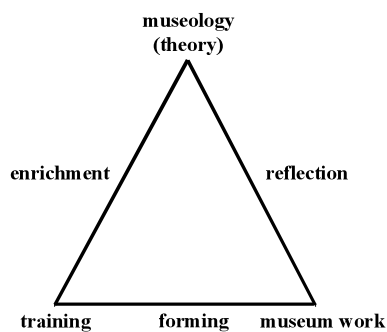
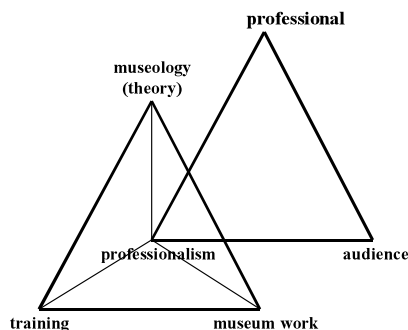


図2



相互に高め合う(ENRICHMENT)という関係が、また同じように博物館学と博物館業務の間には、影響し合う(REFLECTION)という関係があり、底辺におけるトレーニングと博物館業務の間には、組織し構成し合う(FORMING)といった相互関係が見て取れる。

(図2)は、こうした関係性の中核に専門化(Professionalism)が位置付けられる。同時にその延長線上には、博物館固有の専門性ととともに観客との関係も重要な要素として位置付けられる。

(図3・4)の四角は、博物館全体の分野(MUSEUM FIELD)を示す。左側が課題関連の学問分野である。コレクションの基にある芸術、美術などがこれらにあたる。右側は、それらをサポートする学問分野である。例えば、教育プログラム、保存・修復する学問、その他の教育に関わる諸学問が位置付けられる。博物館学は、博物館コレクションの主題(芸術、美術など)とそれを明らかにし、発展させるための手段としての学問とが融合されたところに位置付けられる。

ヨーロッパやアメリカでは、19世紀から20世紀の初頭にかけて国家的な博物館の組織が全国的なものとして設置され、国家的、国際的な雑誌の発行をはじめコミュニケーションハンドブックやトレーニング・プログラムが作成されてきた。この時期に、「博物館学」が発足し、博物館学の共通化がはかられたといえる。

(図5-1)の組織図は、コレクションとのかかわりの中で構成されてきた、伝統的な博物館における

図3

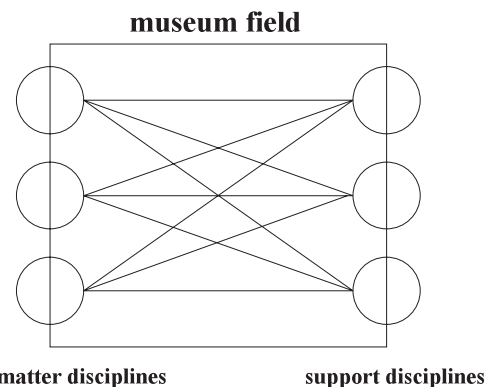
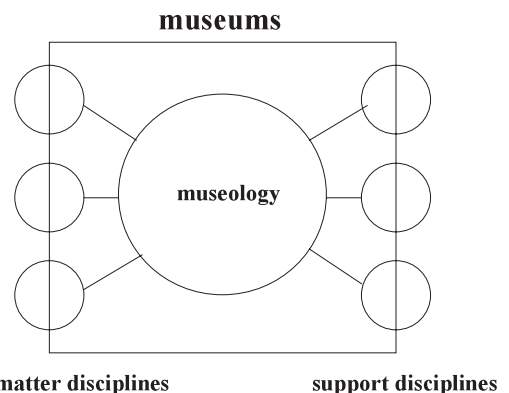


図4



組織図である。その部門にはキュレーター（学芸員）がいて、調査、研究、管理が行われてきた。しかし1960年以降、博物館に改革運動が起こり、学問中心型の組織体制から、博物館がコミュニケーションの媒体である、という新しい観点に基づいた組織のあり方、またそうした考え方に影響され、博物館学を応用コミュニケーション科学として再定義する動きが起こり、こうした潮流が主流になっていった。

（図5-2）は、新しい時代の組織図である。それまで博物館では採用されてこなかったスキルの人々、例えば学校の先生といった教育のバックグラウンドをもった人々が採用されるようになり、彼らはコレクションの研究や管理、記録とは異なる、コミュニケーション部門の担当者として来館者を迎え入れ、利用者と向き合うようになった。これはコレクションをベースとしてきた組織から、博物館のコミュニケーション機能（展示、教育、来館者サービスなど）を重視する組織体制への脱皮である。現在、オランダでは博物館職員の80%までがキュレーター以外の専門職で占められている。

（図6）は、博物館が社会と物質文化との関わりを示したものである。博物館資料の価値は、初めは

経済的な価値によってはかられていたものが、記録的な（DOCUMENTARY）価値に基づいて体系化がはかれることで、経済的な利用価値から、文化遺産としての利用価値へと移行していく。このプロセスを博物館化（MUSEALISATION）と言っている。そして社会との関係を記録的な価値によって規定することを博物館性（MUSEALITY）という言葉で表わしている。資料の博物館化は、とても大切な課題である。

（図7）は、博物館学の方法論について考察するためのモデル図表である。真中に位置付けられているものは、遺産（HERITAGE）であり、その外を囲んでいるものは機能、活動（FUNCTIONS）であり、その外側には組織、制度（INSTITUTIONS）、一番外側に社会（SOCIETY）がある。

（図8）は、新しい博物館学における力学的な方向性を示したものである。つまり、最も重要なのは、遺産と社会との関わり方にあり、機能や組織、制度との関係は二の次であるということで、しかも初めに社会があって、遺産がある、という関係が大切なのである。

ここに新しい時代の博物館のあり方が見て取れ

図5-1

Collections based organisation

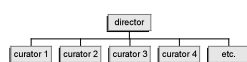


図5-2

Functions based organisation

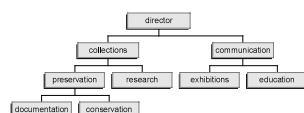


図6

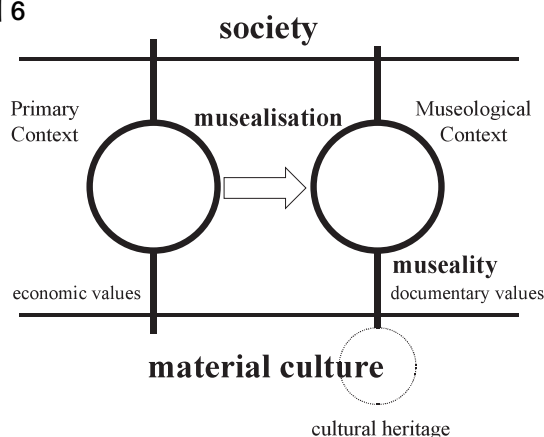


図7

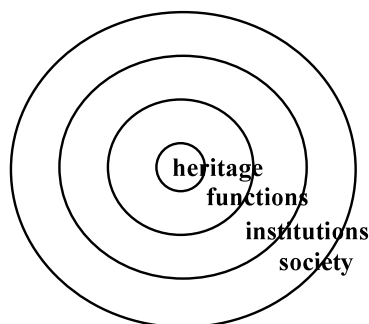


図8

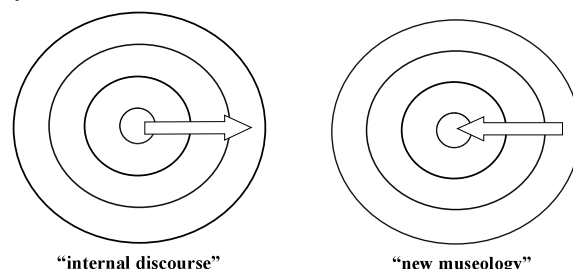


図9

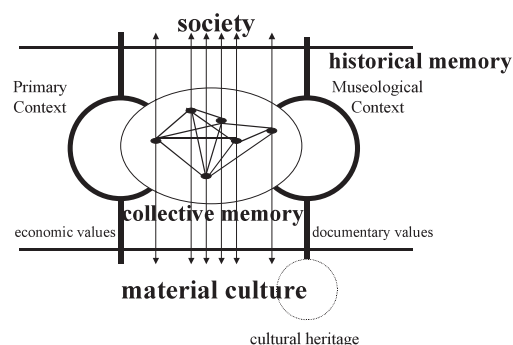
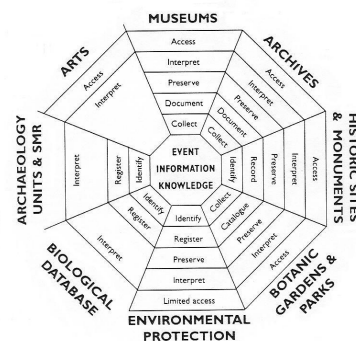


図10



る。つまり、コミュニティ博物館こそが新しい博物館学のモデルであり、そこには博物館のユーザーが博物館のサポーターにもなり、彼らが運営の一端を担うようになることで、学芸員とエンドユーザーとの垣根が、今後一層あいまいなものになっていく。博物館は、社会的な一種の再生装置であり、社会変革の再生エージェントに例えることができる。

(図9)は、社会と物質文化の関係の中で、歴史的な記憶を社会的な記憶として組織化、体系化することの意味を説くものである。記憶の場所がお互いに関連し合い、ネットワークを形成し、社会的な意味を作り出しているということにも配慮が加えられるべきである。

(図10)は、ECにおいて文化的な内容に関して、統合的なアプローチ手段を開発、共有化することによって社会機構の中で「文化的な情報の倉庫」を機能させようとの意図から、そのパラダイムを整理したものである。

(図11)は、博物館の基本的な機能を図示したもので、保存(RESERVATION)の中には保全や修理と同時に記録化という使命も含まれているということ、研究(RESEARCH)は、ヘリテッジをベースとした研究を指し、コミュニケーションは、展示、教

図11

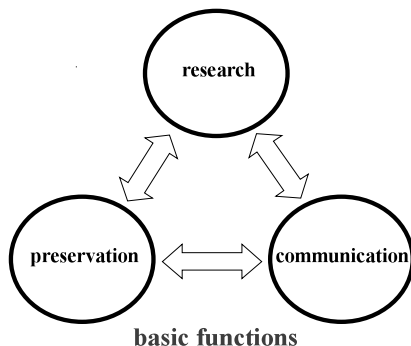


図12

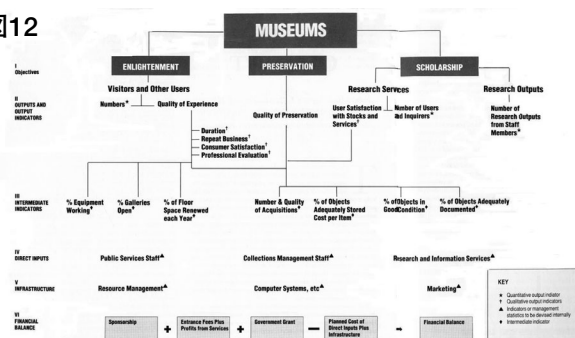
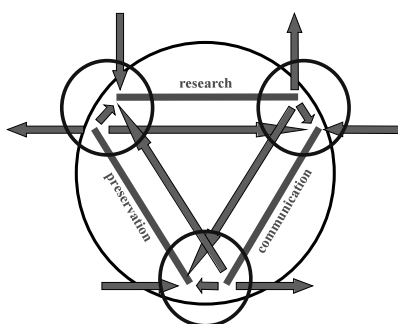


図13



育活動、イベント、出版活動を含めたものを言っている。大切なことは、新しいパラダイムがあるという事である。

(図12)は、博物館学的な考えとマネジメントの考え方を統合することの意義及び重要性を示す資料である。そこではパフォーマンス・マネジメントの重要性が増してきており、効果的、効率的に博物館活動が行われているかを測定するパフォーマンス測定が一つの重要な評価尺度になっている。

(図13)は、博物館の基本的な活動である3つの分野(研究・保管・コミュニケーション)を示し、博物館がインプットとアウトプットのシステムを備えるものとして、それぞれの分野が機能しあった関係性の中で、お互いの有用性をインプット、アウトプットという観点から抽出しようと試みた図である。一つのアウトプットは、一方でのインプットでもあり、また必ずしも一つの機能のアウトプットが、別のある機能のインプットだけに応えるものではない、ということが理解できる。博物館は、機関として独立したものであるが、他の世界との関連性も強く、組織の外でのインプット、アウトプットも充分に考えられ、博物館の新しいマーケットに対する認識にも繋がるものがある。

(図14、15)は、博物館の事業活動と収入との関わりを示したものである。例えば、使命に対する貢献と収益に対する貢献の双方の視点から見て、どの分野が強く、またどの分野を重点課題として進めていくべきか、またその一方で倫理的な板ばさみがどこで生じてくるかなどがアイテムとして上げられている。これらの分析によって、持続可能な博物館運営の構想を描くことができ、説明責任や地域社会への投資の是非などの妥当性にも利用できる。研究や

図14

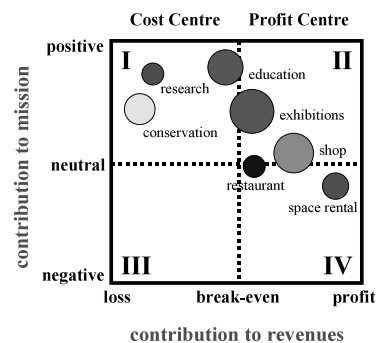
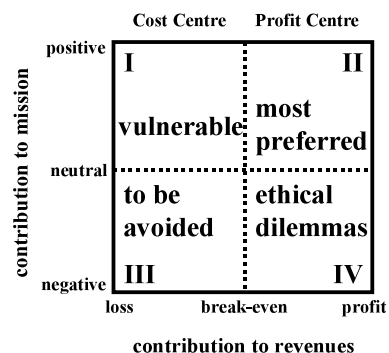


図15



コレクションの保存は、社会から攻撃を受けやすい（VULNERABLE）事業として位置付けられ、投資対効果では最も収益を生むスペース貸しは、倫理的な板ばさみ（ETHICAL DILEMMAS）に入れられている。

（図16）は、コトラー・イン・ミュージアム・ニュースからとった資料で、博物館が対象とする人々が博物館を訪れる時の交換のプロセスを示したものである。博物館の備える資源や教育、学びへの対応など利用者にとって利益となるものを博物館として備えることが求められている。

（図17）は、博物館において、利用者にチャレンジする機会を与えること、例えば博物館でさまざま

な技術が習得できるようにする試みも重要である。そこには、挑戦者に対して高すぎなく、低すぎもない程よい高さが求められるわけだが、そこには「流れ」（FLOW）という視点が欠かせない。この「流れ」は、来館者自身が持ってくる場合もあるし、博物館との協働作業でこの「流れ」を作る場合もある。知識や体験を習得するには熟練した技能が必要とされるが、その度合いが大きすぎれば一般の参加者からは敬遠されるし、簡単に習得できるものであれば、また魅力あるものにならないなど、プログラムの演出にも有効で飽きさせない「流れ」を構築する必要がある。

図16

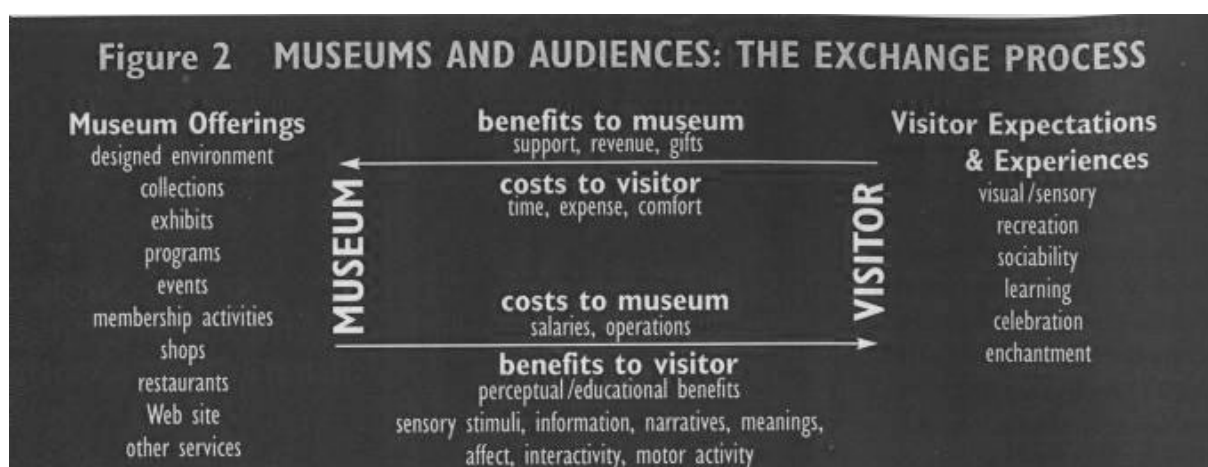
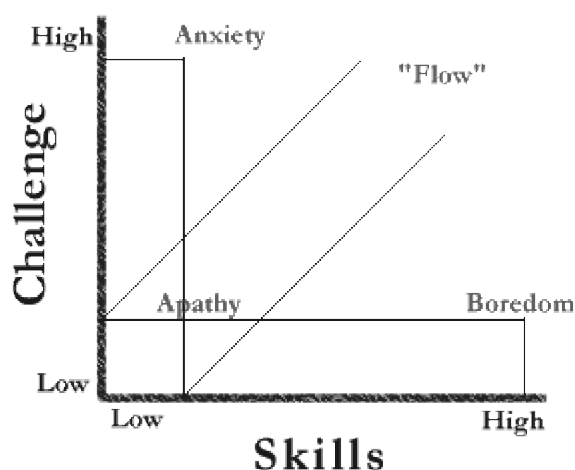


図17



詳しい報告書は、別冊「21世紀型ミュージアム・マネージメントの創造—ミュージアム・マネージメント学の確立のために—」（有料）が発行されておりますので、必要な方は事務局までご連絡ください。

論考・提言・実践報告

町内作家が運営する井波美術館物語

井波美術協会会長／井波美術館理事長

長谷川総一郎

はじめに

本文は小さな井波町で多くの作家組織が運営する小粋な井波美術館の歩みの物語である。16年前に開設した頃はバブル景気の最盛期。組織の上層部は勢いもあり、その下に若手の作家軍団が控えていた。だが、16年も経過すると組織の制度疲労、作家のインセンティブの低下や構成年齢の上昇化が露呈。一方では、今は不況や国家予算の歳出削減の時代。そして市町村合併を直前に控える。井波作家の先達が営々と築いてきたサバイバルを賭けた美術文化の発展へのベクトルを今後どのように継承するのか。課題は重い。

本文は井波美術館（以下、美術館）の初めての小史である。未来を見据えるために過去を顧みることは重要。文化立国日本の一翼を担う美術館運動を考える材料を北陸の小さな町から発信する。



図1 瑞泉寺本堂

木彫りと信仰の里・井波町

井波町は富山県南西の砺波地域に位置する。人口は10207人。信仰と木彫りの町で知られる。南北朝時代末期に建立の瑞泉寺創建を町のはじまりとする。江戸中期に瑞泉寺は焼失。社寺再建を機に京都から大工彫刻の技が伝授。この技を町の職人が継承し今日の木彫りの里に成長した。

明治期までは堂塔大工が受注した大工彫刻の製作を主としたが、大正初期には住宅の彫刻欄間が開発され、昭和期には置物、獅子頭、天神様や祭り彫刻、昭和50年代には欄間技法を小さい額に仕立てた飾りパネル、近年には木彫彩色の内裏雛が製作モチーフに加わった。

現在、町には木彫刻工房が約130軒。木彫刻師が約200人。経済産業大臣産地指定の近隣市町村を含めると全体で約180軒の約250人。井波彫刻協同組合（以下、組合）の総数は132名。その内、25人（18%）が日展など美術展出品者。伝統木彫刻集団の地域集中度、職人数や技のレベルでは日本一。世界でもトップクラスである。

井波美術の作家組織の発展

社寺の内陣彫刻は漆塗りが伝統のため井波では漆塗師も多かった。その中から昭和初期の頃より商工省展や帝展に出品する作家志向の職人が現れ、あとに木彫刻師が続いた。昭和16年文展工芸部門に一挙に5人が入選。翌年井波工芸美術協会が結成された。



図2 井波町八日町通り、右側奥突き当たりが瑞泉寺



図3 井波彫刻まつりに並ぶ天神様彫刻（井波彫刻協同組合主催）



図4 彫刻欄間（井波彫刻総合会館パンフレット）

以降、特に戦後は日展の工芸や彫刻部門に大量の入選者を輩出。今日まで実数で約90人が日展に入選。日展特選受賞者や評議員資格者は現在12人という日展の町として全国にその名を広めている。

前述の作家組織は昭和30年には井波美術協会（以下、協会）に改組新発足し、工芸、彫刻の各部会が作られた。後、書道、写真、絵画部会が続き、会員数は現在67名。その内、木彫刻を生業とする者は36人（53%）。協会員の中の彫刻と工芸部会会員が45人（68%）。日展出品者は過去出品者を含めると40人（60%）となる。

昭和40年代より日展以外への出品者が現れた。工芸や彫刻では少数であるが彫刻の二紀展、新制作展、工芸の日本伝統工芸展など。書道では玄土社、写真はモダンアート展、国画会、絵画は一陽展、亜細亜美術展などである。

美術館設立要求運動の起こり

大量の日展出品者と権威ある作家の地位を数多く獲得してきた協会。ここから作家たちの入選や入賞作品を展示し、井波美術発展に貢献のあった物故作家の作品収蔵を主目的とした美術館建設の気運が高まることは当然の帰結である。

昭和45年協会では初めて美術館建設が審議された。47年には美術館竣工を50年と設定。建設資金調達を審議し建設委員会を組織。52年、澎湃として建設促進熱が高まった。町と折衝し、建設実行委員会を結成。それは、美術・工芸の一方の組織である組合では、組織の核となる井波彫刻伝統産業会館（以下、伝産会館）が別棟の木彫刻訓練校とともに2つの施設の同時建設が県議会で決定されたからである。その伝産会館の機能に協会の参画が検討されたが、結果的には54年伝産会館は単独で竣工オープンとなった。

以後、美術館問題は、沈静したかに見えたが一方の伝産会館誕生によって却って協会にマグマが溜まった。それが銀行移転によって再燃。60年、瑞泉寺前の八日町通りにあった北陸銀行がショッピングセンター新装予定の敷地に移転。建物は町に移行。この建物の跡利用に、協会の美術館開設構想が急浮上。

井波美術館設立委員会名簿

会長	横山一夢
相談役	板橋一歩、南部吉英、横山豊介、武部豊、
委員長	森田清一
副委員長	川原和夫、堀友二、
事務局長	横山善一
会計	野村清、志観寺範徳、
協力金検討委員会	○堀友二、野村清、溪斎、新敷孝弘、畠山勲、山城宏之、大野晃一、志観寺範徳、加茂為男、
工事監督委員会	○川原和夫、南部栄、横山幹、前川正治、谷口信夫、青山三郎、
財団法人設立委員会	○長谷川総一郎、常川汀華、横山善一、宮崎雅司、
広報、宣伝委員会	○横山幸文、田村登、土田信久、浜坂中義、東山俊郎、川田良樹、横山清、
○印は担当責任者	

図5 井波美術館設立委員会名簿（昭和62年4月）



図6 井波美術館開館式の新聞記事

61年、協会は悲願実現の好機と捉え町に町立美術館開館の陳情を頻々と重ねた。

昭和62年3月、美術館開設をめぐる町と協会との折衝はもの別れ。争点は、協会は展示と収集保存機能をもった町立クラスの施設を要求。しかし、町は協会が管理運営し展示機能のみの財団法人形式で、旧銀行の改修費は協会負担を提示。当時の町は新規の文化施設建設は困難な状況にあったのか。それは、63年完成予定の町総合文化センター建設で大型の地方債を起し、その債務返還終了までは年数があつたからだ。職人気質で一本気な協会長は、責任を取りたいと任期途中で協会長を辞任した。

公設民営の井波美術館のオープン

昭和62年4月、急遽就任した後継の協会長は旧銀行の建物を町より無償で借り、改装と運営を協会員有志が行うという現実路線を選択。美術館設立委員会（以下、設立委員会）発足を臨時総会で決定。ここに悲願であった協会の美術館は実現へと始動した。

新設までの一時的な資金は、協会員有志の寄付金1000万円、町補助金300万円、協会の美術館建設積み立て金240万円などで賄うこととした。

旧銀行建物は、大正13年築造。ルネサンス様式を取り入れた洋風意匠のモダンな文化財級建築物。町民にとっても瑞泉寺前の八日町通りに位置する観光のシンボリック存在。町所有は保存の意味もあったと思われる。

美術館の開館は3ヶ月後の7月15日と決定された。準備に待ったなしである。町と建物借用契約。建設業者に旧銀行の改装を発注。協会員より改装資金1000

万円の寄付金の調達計画。組織、館則や運営規則の設定。広報宣伝の計画。開館祝賀式の計画など。設立委員会約30人はほぼ毎晩、専従スタッフのように開館準備に突っ走った。

取り決め事項は25頁からなる館則と運営規則にまとめた。そのなかの主な事項について私見をまじえて紹介する。

- ① 名称：井波ギャラリー案もあったが憧れの井波美術館（以下、美術館）となった。
- ② 設置主体者：協会の有志とし、美術館「会員」は協会会員と紛らわしいので、美術館「同人」と呼称した。
- ③ 設置形式：町立でも財団法人でもなく、美術館同人が運営するという一種の「公設民営」の形式。町が提案した財団法人は、協会の財源不足のため断念。
- ④ 館長：館の代表者として外部の顔と館務に努める。無償とし、これを協会員以外から招く。
- ⑤ 理事長：協会長がつとめ、最高責任者とする。
- ⑥ 運営委員会：町長、議員や町内の学識経験者9～13名で構成し、館運営への助言や監督を行う。
- ⑦ 同人取得の資格：全国的規模の展覧会に出品した者で、館運営協力金12万円（1口3万円で4口）以上拠出した協会員。開設時は協会員総数68名の内52人（76%）が同人に登録した。協力金（寄付金）は役職順に当て、上位は100万円1人、70万円1人、50万円2人、30万円は4人が拠出した。
- ⑧ 事業内容：同人による創作作品の常設展示を基本としながら随時企画展を開催する。収蔵保存はできない。
- ⑨ 展示面積：1F110㎡、2F90㎡（小部屋4室）

こうして作家仲間が無償で自主運営する全国にも稀な美術館が誕生した。年間の運営資金は、町の運営補助金50万円。同人の年会費1人12000円、入館料、協会積立金150万円前後。一種のNPO方式の先駆けと言えようか。

今、回顧すれば無謀にも見えるが、経済成長の時代背景、協会結成45年間の実績とプライド、美術館要求運動17年間に鬱積したマグマ、当時の協会幹部のエネルギー、設立委員会スタッフの60%が30～40代という働き盛り世代、固い結束力などが、短期間での開設を可能にした。

16年間の企画展などの実績

展示は、同人作品の常設展示を基本とした。年2～3回程度の展示替え。日ごろ、協会員のアトリエに保存している自信作を井波で公開することが、もともとの設立動機だったから、小さい美術館に等身大の裸婦像、大型の漆芸や木芸の二曲屏風（スクリーン）などがずらりと並んだ。

同人展の他に年1回は特別な企画展を実施。実施後は実績に対して町は補正予算措置をとり、30～50万円を補助した。さらに随時貸し出しの展覧会も実

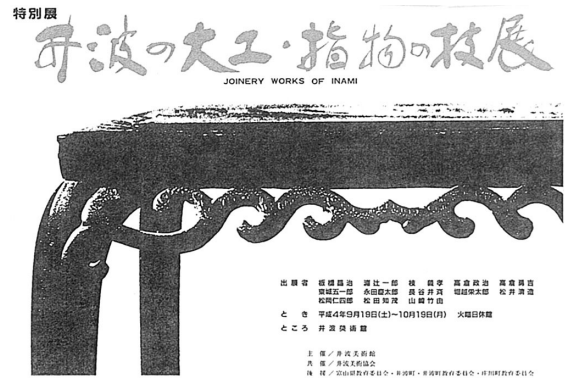


図7 特別展、井波の大工・指物の技展のDM

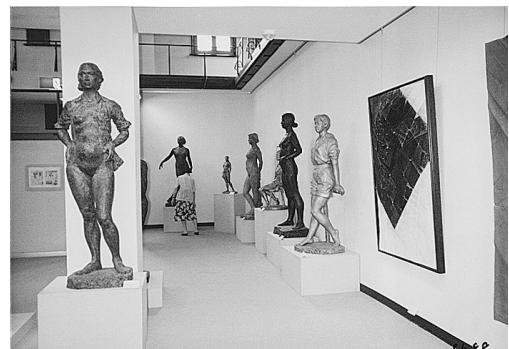


図8 特別展、板橋一步・森田清一・堀友二3人遺作展の風景

施。以下、同人展以外の展覧会を記述する。

昭和63年：不詳（半年間なので、同人常設展のみと記憶）。

平成元年：玄土社瑞穂書会展、草月グループ蒼展、井波美術協会小品展、町報表紙原画展、信楽焼作品即売展、小中学生徒作品展、富山県立近代美術館移動展89、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成2年：玄土社瑞穂書会展、草月流いけばな展、町報表紙原画展、井波美術を築いた作家展、アフリカン・ヘリテージ（ワカンバ族）木彫展、井波小中学校児童生徒作品展、小原流いけばな展蓮如上人庵への道。

平成3年：玄土社瑞穂書会干支色紙展、森田清一同門展、町報表紙原画展、いなみ国際木彫刻キャンプ91招待作家小品展、小中学生徒作品展。

平成4年：玄土社瑞穂書会干支色紙展、開館5周年記念井波の大工・指物の技展、小中学生徒作品展、富山県立近代美術館移動展92。

平成5年：玄土社瑞穂書会干支色紙展、いなみの日記念人間国宝展、小中選抜絵画とポーランド児童画展、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成6年：板橋一步・森田清一・堀友二3人遺作展、小中学生選抜絵画展、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成7年：いなみ国際木彫刻キャンプ95招待作家作品展、井波小中学生絵画展、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成8年：井波美術の先達「横山白汀」展、井波小中学生絵画展、井波美術協会による珠玉のチャ

リティ展、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成9年：井波小中生選抜絵画展、井波美術協会による珠玉のチャリティ展、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成10年：スライドトーク独ろくろ産地エルツゲビルケ (K. ブラウネ)、井波美術の先達「宮崎辰児」展、井波小中学生選抜絵画展、井波美術協会による珠玉のチャリティ展、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成11年：米オレゴン州伝統工芸作家との文化交流会、いなみ国際木彫刻キャンプ99招待作家作品展、富山県デザインキャンプ、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成12年：S.ショレのパントマイム (独エルツゲビルケとの交流)、前川大地展、井波美術の先達「横山玉抱・西田秀」展、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成13年：いなみ小中学生版画展、ふるさと未来21・井波展 (北日本新聞主催) 同時開催で井波の作家たち展 (2F)、まちなみアートリレイ IN いなみ前夜祭・シャンソンライブ、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成14年：いなみ小中学生版画展、富山県展受賞作品巡回展 (県主催)、まちなみアート IN いなみ前夜祭・シャンソンライブ、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

平成15年：いなみ小中学生版画展、斉藤晴之 NY 見聞スライドトーク、美術協会結成60周年記念いなみ作家の今展、協会員によるギャラリートーク (2回)、いなみ国際木彫刻キャンプ03・絵を描くコンクール展 (受賞作)、いなみ国際木彫刻キャンプ03・フォトコンテスト展 (受賞作)、まちなみアート IN いなみ前夜祭・シャンソンライブ、玄土社瑞穂書会干支色紙展。

企画展は1ヶ月、貸し出し展はほとんど1～2週間程度なので、1年間の9割近くは同人の常設展である。

16年間の管理運営の苦闘の歩み

① 見込み入館者数届かず、漸減傾向

開設当初、伝産会館 (54年開館) 60年度入館者

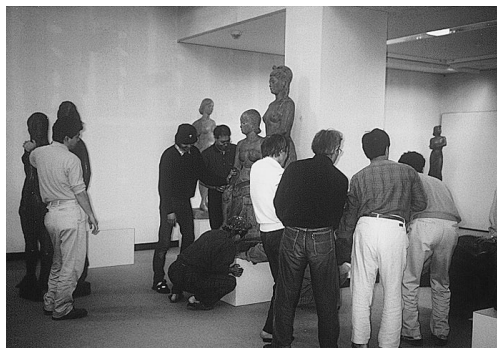


図9 同人による特別展の展示風景

数の5万人を参考に4万人と当て込んだが、当初の入館実数はその4分の1。以降7年間は約5000～6000人台を維持。その後3000から1000人台にダウンした。

② 運営資金の慢性的逼迫から同人は労働で貢献

入館者数の見込み違いと漸減は運営資金の逼迫を請来。開館1年後、年間100万円の不足のため、同人より年間12000円拠出を会費の他に徴収。開館14ヶ月後には臨時職員を解雇し、正副理事長の奥さん達が交代で当番に従事。平成元年6月より新たに臨時職員を新規採用。その後、平成13年までは同人が日曜日のみ半日交替当番の年もあった。企画展の時は3時間ごとに同人1～2名の交替監視当番。14年からは1年間全て2人の臨時職員が交替で常駐。同人の負担は多少軽減された (12年度から冬季休館)。

③ 同人の士気のダウン

開館10年過ぎより、同人の美術館当番 (日曜日) に無断欠席が現れ、それまで企画展の運搬や展示に集合してきた同人数は漸減。同人の美術館運営に対する初期の熱い思いが希薄化。その背景には、景気後退、協会員の若手新入会員の減少、それに伴う同人平均年齢の上昇などがある。

④ 町への補助金増額要求と町のスタンス

井波美術館展覧会のご案内 2004. 2～12		
展覧会名	会期	内容・その他
松田真治彫刻展 ーテラコッタとの対話ー	2. 27～3. 3 期間中休館なし	富山大学大学院美術教育専修修了にあわせて、松田真治氏の人体をモチーフとしたテラコッタの魅力を紹介。大正期洋風建築の美術館にマッチしたピアノとフルートのコンサート。
※作者によるギャラリートーク	2. 28 (入館料無料)	
いなみ小・中学生アート展 ー絵画・立体造形・版画ー	3. 5～11 期間中休館なし (入館料無料)	井波小・中学校の子どもの優秀美術作品を展示します。 (小学生80点、中学生30点)
井波美術館同人による作品展	3. 12～4. 19 (入館料無料)	絵画・彫刻・工芸・書・写真5部門にプリミアントな光を放つ井波美術館同人49名の作品を展示します。
永田幹生木芸展 ー古の調べー	4. 21～5. 3 (入館料無料)	「追想鏡シリーズ」古代の神獣鏡をモチーフにした木彫パネルと、木象嵌の木芸棚、合わせて20数点を展示します。
井波町報表紙を飾った 前川正治工芸展	5. 5～10 (入館料無料)	平成15年度井波町報の表紙を飾った前川正治氏の工芸作品12点を展示します。
上林三千代・常川あさ子二人展 ー前衛書を楽しむー	5. 12～17 (入館料無料)	書の研究グループ玄土社に所属する二人の自由な表現を試みた作品を展示します。
井波美術館同人による作品展	5. 19～7. 26 (入館料無料)	国際木彫刻キャンプで活躍した地元作家たちの作品も多く展示します。
高山の美術を拓いた 井波美術のあけぼの展	7. 30～8. 30 (入館料有料)	昭和10年頃から20年代、井波美術の発展に貢献のあった曙期の作家の作品を展示します。
土田信久木彫展	9. 1～6 (入館料無料)	木から彫り出される生命感に満ちた作品を展示します。
横山善一「雪国のロマネスク展」	9. 8～13 (入館料無料)	ロマネスク教会の古寺巡礼からの印象を木彫と色紙で発表展示します。
井波美術協会員による 小粋なアート展	9. 15～27 (入館料無料)	ミニスペースをすてきなアートで飾ってみませんか。まちなみアートINいなみ(9.18～20)に合わせて約100点を展示。頒布もいたします。
茶道具を彫る匠たち展	9. 29～10. 18 (入館料無料)	茶道具を彫るという新しい試み。6～7人の匠が響を振った作品40～50点を展示します。
井波美術館同人による作品展	10. 20～12. 27 (入館料無料)	個性あふれる作品群の中で、秋のひとときを。力作を展示します。
玄土社瑞穂書会干支色紙展	12. 23～26 (入館料無料)	中国古代の文字、甲骨・金文を元に創意をこらし、干支の酉・鳥を書いた作品を展示します。

井波美術館 〒932-0211 富山県東砺波郡井波町井波3624
TEL. FAX. 0763-82-5523

図10 平成16年の年間展覧会案内

同人達は運営資金の窮状を町に訴え、美術館の町立化、もしくは最低限は学芸実務の能力をもった常駐職員採用の実現をほぼ毎年陳情。町はそれに対して運営補助金の漸次微少な増額で対応。開館当初40万円、平成元年50万円、7年70万円、8年120万円となった。しかし、この金額は、博物館条例に基づいた市立や町立の美術館が近隣に次々と華々しく開設される状況にあって、美術のプライド高き同人達の思いを充たす額には到底届くものではない。

町は町立化できない理由として、類似施設が2館も設立済みで、町の規模として3館目の開設は議会や町民の理解が得られないという。高瀬歴史民俗資料館は昭和51年博物館法に準ずる施設として開設。平成5年には博物館条例に基づく町立施設に昇格。伝産会館は昭和54年開館し、平成5年に井波彫刻総合会館に移転新装オープンしている。

市町村合併と財政構造改革下における井波美術館の再生への試み

平成13年同人から取った美術館に関するアンケートでは閉館希望者は25%。その理由を詳細にみると、運営に関する労働負担が大きい、との声。つまり、負担がなければ継続したいとのこと。これは、16年1月の合同役員会でも確認された。つまり本当の閉館を希望していないのである。

しかし、この1～2年、特にここ半年の間、国の急激な税収減と歳出圧縮のもと国民の負担と受益の在り方の議論が浮上。住民負担に応じた行政からの受益の獲得に移行しつつある。地域力や住民力が受益の前提条件になってきたのだ。行政の予算配分は平等配分から実績重視の重点配分にシフト。経済の右肩上がり時代のように「打出の小槌」を振れば受益を引き出した時代は終わった。そのような回顧的発想では合併後には美術館の廃止もやむを得まい。

7割強が木彫刻や漆塗業という同人組織に押し寄せる不況の現実には厳しいものがある。一方での実績主義という時代潮流は同人達にも徐々に自覚されつつある。そこで以下のような美術館再生の施策をとった。

① 美術館からの情報発信量の増加と入館者増

私は平成15年1月美術館副理事長から理事長に推挙された（任期2年）。たまたま昨年は4年毎開催の第4回「いなみ国際木彫刻キャンプ03」の開催年にあたり、諸行事を急遽計画。先ずは美術館からの「情報発信量の増加」と「入館者増」をねらった。それによって八日町通りの賑わい創出や町活性化に貢献しようというもの。

情報発信量の増加対策は、年間事業計画の見直し。入館者増対策の一つとして同人展を試験的に無料化と決定。

② 運営資金増と展示内容のリフレッシュ化

事業計画見直し実現のネックは、資金不足と見慣

れた常設展示の内容。資金対策については、減少したまま未補充の同人数を補充し、会費収入増から財政基盤を強化。開設当初52人居た同人は16年間に40名まで減少。死亡、倒産や美術展出品取り止めによる退会。その後の対策が放置されてきた。協会員から新たに10人を同人に勧誘。また、町の提案により、これまで実績に対する補正予算措置があったが、これを合併前に通年の運営補助金への組み込みを選択した。まだまだ満足しがたい金額だが、平成16年度より計150万円となった。

展示内容のリフレッシュ化は、同人作品の企画方針の見直しや外部作家による美術展の導入。具体的には、同人の個展やグループ展の開催勧誘と同人を中心とした井波の彫刻工芸とは異なる美術展の積極的導入である。これによって情報発信量は増加し、入館者増も期待されよう。

③ 貸し出しのための「ご利用規約」の新設

16年の歴史で貸し出し展は、特に初期は多かった。その後同人の意識のマンネリ化が進んだのか。16年一貫して貸し出し展を利用してきた同人は玄土社瑞穂書会展（同人を含む）だけ。資金対策の一つとして貸し出し展は積極的に勧誘したい。そのためには貸し出し料金や詳細なルールが必要となり、この度「ご利用規約」を新規作成した。

おわりに

今年11月、井波町は近隣の8市町村と合併し南砺市となる。でも合併後の地域力や文化発信力の低下が心配される。欧米やアジアなど20数カ国を見聞してきたが、今でも人口500～2000人程度の自治体は意外に多く、地域的個性の発信力は高い。日本の行政の貧困を感じざるを得ない。

しかし、合併という船は出てしまった。後戻りできない。合併後、自治体で温存されてきた各種団体への補助金の削減や見直しは必至。国民や住民にとって過負担と知恵が必要な時代がやってきたのだ。16年を「井波美術館の再生元年」と位置づけ、目に見える実績を上げることによって合併後の美術館のサバイバルを賭けたい。以上、地域からの美術館運動を述べた。読者からのご教示を仰ぎたい。

「テーマ」としての遊廓

株式会社 乃村工藝社

田上 仁志

1. はじめに

博物館において扱われるテーマには様々なものがある。歴史、科学、文化といったものが一般的ところで、細分化していくと実に際限なく出てくる。

そんな中でもテーマにしにくい、いやいろんな理由から出来ないといったものも多々あるのではないだろうか。今回はそういったものの中から遊郭というものを取り上げてみたい。果たしてこれがミュージアム・マネージメントに示唆を与えるものと成り得るかどうかは大きな疑問が残るところなのだが。

2. 遊郭とはどういったところか

試しに『広辞苑』でこの言葉を引いてみると、

遊郭…多数の遊女屋が集まっている一定の地域。
貸座敷営業が許可されている地域。いろいろと。いろまち。くるわ。遊里。

とある。簡潔に言うのご存知の通り「遊女と遊興する場所」なのであるが、しかしその中に「くるわ」という説明がある。漢字では「郭」と書くのだが、城郭の文字にも使われているように、「周囲を（堀や塀で）囲われた」といった意味を持っている。すなわち遊郭も周囲を堀や塀によって囲われていたのである。「臭いものには蓋を」の精神がよく見えるというか、遊郭の扱われ方がよく表れている言葉だと思う。

実は、遊郭が「くるわ」の形態となったのは江戸時代からであって、それまでは隔離されていなかった。というよりそれまでは許可を得ずに営業しているのであって、隔離なんてされるはずもなかったのである。江戸幕府は戦乱後拡大していく都市の秩序を保つため、遊郭を1箇所に集めまとめて管理しようとし、周囲を堀や塀で隔離した中でだけ営業を許可したのである。

加えて遊郭は「悪所」と呼ばれるなど、一般社会からは差別視されており、社会的にも物理的にも隔離されていたのであるが、その内部はというと、花魁や太夫といった気品と素養を兼ね備えた高級遊女のいる場所であり、揚屋という一般庶民が味わうことの出来ないほどの豪華さを持つ特異な建築を有する場所であって、芸能や言葉など独特の文化を作り出していた賑わいの中心だったのである。

3. 賑わいの遊郭

賑わいの中心であったことを示すものとして図をあげて紹介してみる。図1は「摂津名所図会」に載せられている大坂の新町へ向かう新町橋の情景であるが、行き交う人の多さ、橋の上まで並んだ店など遊郭周辺の賑わいが十分に見て取れるだろう。

図1 「新町橋」『摂津名所図会』

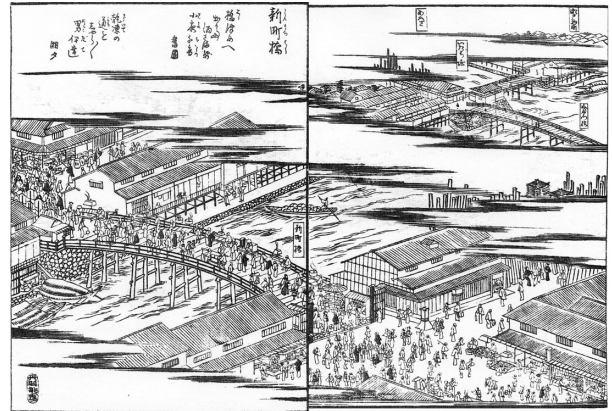
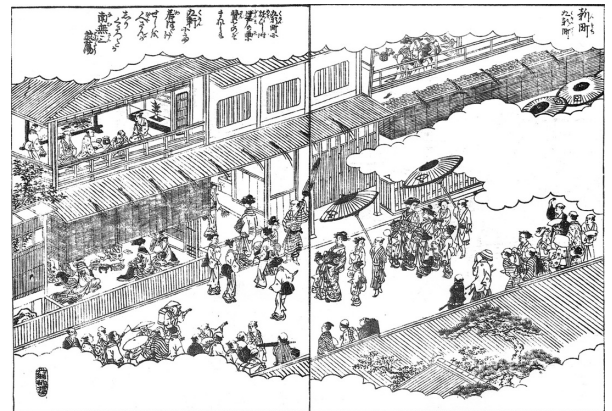


図2 「新町九軒町」『摂津名所図会』

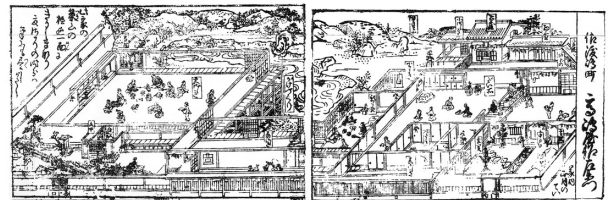


さて、内部の情景はというと、同じく『摂津名所図会』には新町の九軒町という場所の情景が載せられている。(図2)

長傘を差されて歩いているのが太夫という最高級の遊女であり、その姿を一目見ようと周りにはたくさんの人が集まっている。遊女は普段女郎屋にいたのだが、客から呼ばれるとこうやってお供と一緒に遊郭内を道中し客の前に現れるのである。

その太夫と遊興する場所が揚屋なのであるが、その揚屋はというと図3のようになっていた。

図3 「佐渡島町 高嶋屋」『滯漂』宝暦版



圧巻は庭で、庭に築山を設けて水を流し、その起伏を利用して大座敷は高足場の上に設けるといった「懸造り」という凝った手法が用いられているのがわかる。

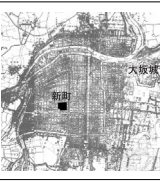
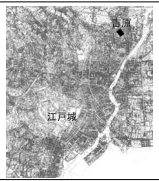
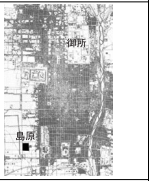
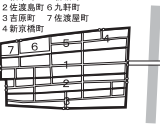
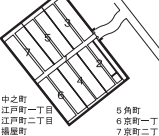
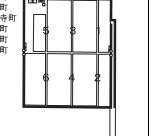
4. 大坂は特別？

ざっと遊郭の情景を見てきたが、江戸幕府によって許可されたのは全国でも、江戸の吉原、京都の島原、大坂の新町、駿府の二丁町、長崎の丸山町の5

箇所しかなく、それ以外は全て無許可のものであった。特に江戸・京都・大坂の三都の遊郭は全国にその名を知らしめるほどのものであったようだ。

江戸には元和三年（1617）葎原遊廓（後に移転して吉原遊廓となる）が設置され、京都には寛永十七年（1640）島原遊廓が開設、大坂には寛永元年（1624）新町遊廓が開設されているのであるが、それらと比較してみると次表のようになる。

表 三都比較表

	新町	吉原	島原
立地			
配置構成 模式図			
沿革	寛永元年（1624）開設許可 寛永6年（1629）営業開始	元和3年（1617）開設許可 元和4年（1618）営業開始 明暦3年（1657）浅草三谷へ移転 吉原遊廓となる。	天正17年（1589）二条柳町遊廓開設 慶長7年（1602）六条三筋へ移転 寛永17年（1640）朱雀野へ移転し 島原遊廓となる。
場所	上博労	浅草三谷	朱雀野
移転	開設以来移転せず	明暦3年深川から移転	慶長7年万重小路から室町六条へ 寛永17年室町六条から移転
敷地形状	4町×4町の不整形	2町×3町の矩形	2町×3町の矩形
隔離	堀十堀（東側のみ）	堀（堀5間のうち2間）十堀	空堀（堀1間半）十土堀
門	開設時：西側中央に1か所 明暦3年（1657）東大門設置 享保9年（1724）吉原町門設置 宝暦4年（1754）新京橋門設置 天明6年（1786）佐渡島町門設置 佐渡島町西門設置	開設時：東側中央に1か所	開設時：東側北端に1か所 享保17年（1732）西門設置 明和年中（1764～71） 東大門東側中央へ移動

遊郭は計画的に作られたのであって、作られた場所というのも未開発の地が選ばれた。それゆえ作り易い矩形の形状となるべきものだが、新町だけはそうはなっていない。また、新町以外は周辺の発展に伴ってさらに郊外の未開発の地に移転させられているのだが、新町は開設以来移転をしていない。隔離について見てみても、吉原・島原は堀と堀によってちゃんと隔離されているにもかかわらず、新町には堀はあるものの堀は東側にしかない。その上、時を経るにつれて様々なところに門が開いていってしまう。これでは隔離なんてあってないようなものである。

上記についてなんとなく大阪らしさを感じるのは私だけだろうか。江戸は幕府の拠点であり、京都は天皇が鎮座するところであった。大坂はというと「天下の台所」と称されるように商人の町であった。それゆえ遊郭においてもその自由さが出てきているのであろうか。

5. 遊郭の都

新町が他の遊郭に比べ自由であったことには訳がある。大坂は2度の幕府との戦いによって廃墟となってしまった都市を発展させるために堀の掘削と新地の開発を行ってきた。「水の都」と呼ばれる所以はここにあるのだが、そういった新地にまず営業を許可されるのが、茶屋と風呂屋であった。それらは公

図4 天保期の遊廓位置図



然と遊郭としての営業を始めてしまうのが実情であって、新地の開発をするたびに無許可の遊郭が増えていってしまったのである。

おかしい話である。無許可の遊郭を集めて管理するために新町を設置したのだが、その一方で新地開発を進め無許可の遊郭を増やしていく。都市の秩序より発展を選ぶ気質も実に大阪らしく思われる。その結果、天保期には図4に示したとおり実に34箇所もの遊郭が大坂に出来てしまっているのである。

6. おわりに

ここまで無理やりながら遊郭について述べてきた。遊郭というと、身売りされ連れて来られた遊女や買売春といったことに主眼を置かれるであろう。無論それらを肯定するつもりは一切無く、それにより様々な啓発をしていかななくてはならないことは承知している。

ただ、単なる買売春の場として捉えられがちな遊郭を違った側面で見ると、繁華の情景や華麗な建築形態、置かれた都市の歴史的背景、特質などといったことが見えてくるのだということを再認識していただき、これをまとめとして付け加えさせていたいただと思う。

最後までミュージアム・マネジメントには触れずじまいで、まったくもって学会の趣旨や「時の話題」といったテーマからかけ離れた文章であることをご容赦いただければ幸いです。

研究部会報告

制度問題

研究部会

第2回研究会

テーマ：NPOと博物館

日 時：平成15年11月22日

場 所：お茶の水女子大学文教育学部1号館会議室

講 師：話題提供「日本の博物館と法人の制度について—NPOと博物館の可能性—」 井上 敏 氏（桃山学院大学）

基調報告「ミュージアムの新しい経営のあり方—4年間のNPO活動実績から—」

亀田訓生 氏（特定非営利活動法人 企業ミュージアムの協会理事長）

報告者：小原 巖（大妻女子大学）

参加者：22名

第2回「NPOと博物館」

制度問題研究部会では今年度の研究テーマを「博物館と経営」として研究会を開いている。今年度予定の3回の研究会を通して、使える、役立つ博物館の経営学について考えてゆきたい。第2回目の今回は、NPOと博物館について取り上げ、博物館経営においてNPOがどのように関わることができるか、NPOは博物館を変えられるかなど、法制度的な条件等も含めてNPOと博物館のあり方について考えてみたい。



講演中の亀田 訓生 氏

1. 話題提供

「日本の博物館と法人の制度について—NPOと博物館の可能性—（井上 敏 氏）」

(1) 現在の博物館がおかれた状況：国公立の博物館では現在行われている規制緩和と行政改革は民活路線上で、効率の良い経営と、地方分権を目的に進められている。その一例として「公立博物館の設置に関する基準」による学芸員数の規定の廃止があげられる。この改正の結果、行政内で博物館に学芸員を置くというインセンティブ（刺激・動機）が働きにくくなった。これは学芸員の数に関する規制が緩和され、学芸員資格がなくとも優秀な人材を確保できるとの見方もあるが、実際には逆の効果として、博物館の職員確保を困難にしている。このようなことが社会的に認知されていないのが実情であろう。

国立の博物館が独立行政法人化され、すでに1年目の評価が出ている。今のところ評価内容は良好のようだが、今後どう変わってゆくか不安は多い。職員は現段階では国家公務員資格だが、これが将来どのように扱われるか不明であり、その扱いによっては国立の博物館に与える影響は大きい。

(2) 指定管理者制度（地方自治法第244条の2の改正、平成15.9.2施行）：従来は地方公共団体の出資法人のうち一定要件を満たすもの等の行政機関系の団体だけしか博物館の管理委託を受けることができなかったが、この法改正により、地方公共団体の指定を受けた「指定管理者」が博物館の管理委託を受けることができるようになった。これにより株式会社等の民間営利事業者を含めた者に対して指定を行うことが可能になり、指定を受ける者に制限はなくなる。しかし、この制度の運用がどのような形で現れて来たか、芦屋市立美術博物館の例を見ると、この館の民間への委託先の模索であり、委託先が見つからない場合は、休館へ追い込まれると言うもので、博物館運営の現状の厳しさが表面化していることが分かる。

(3) 非営利法人制度の創設：博物館法によれば、登録博物館の要件として、民法34条による公益法人の設立によるものとされている。その後NPO法が成立して、博物館の運営に新たな制度による法人の関与が増えることとなった。しかし、このNPO法も、その後制定された中間法人法も民法34条の公益法人制度と統合され、新たな非営利法人が作られる方向で検討が行われている。この新たな非営利法人制度の内容は今後どのようになるか全く分からない。従って博物館と非営利法人制度との関係について、博物館側から非営利法人制度に関して急いで提言を行う必要がある。特に税制等に関しては強力な働きかけを行うことが緊急の課題と思われる。

(4) 博物館に関する新たな制度を構築する必要性：今の博物館法は、教育権を基本的な枠組みとして博物館の制度を構築している。しかし博物館はその成立の歴史からみても現在の登録制度のあり方からみても教育権の面だけで捉えるべきものではなく、新たな制度を構築する必要がある。その意味で文化芸術振興法が制定され、「文化権」への注目が集まる中、その「文化権」から博物館に関する法律の組み立てを考えてみても良いのではないか、と思う。こういった観点から（3）で触れた博

博物館に関する非営利法人制度の整備の問題も含め、新たな博物館に関する法制度を考えてゆく必要があるのではないだろうか。

2. 基調報告

「ミュージアムの新しい経営のあり方—4年間のNPO活動実績から—」 亀田訓生（特定非営利活動法人 企業ミュージアムの協会理事長）

(1) なぜNPOを立ち上げたか：企業が様々な形で文化に貢献しているが、これがあまり知られていない。余暇の時代にあって人々の知的要求が強い。また教育が学校に偏りすぎている。このようなことを実感し、企業ミュージアムを社会的に紹介し、企業ミュージアム館相互のネットワークを作り活動を活発にしたいとの思いから、「企業ミュージアムの協会」をNPOとして立ち上げた。

(2) NPOとは：日本のNPO（特定非営利活動法人）の総数は2003年6月末現在11,899。この内、芸術文化を主目的とするものは約550法人である。これはアメリカのNPOの総数が140万～150万と言われるのと比較して遙かに少ない。

NPOは、ふつうボランティアグループや自主的な活動を展開する市民活動団体などの非営利団体を言う。その役割は、行政や企業には向かない公共的公益的な社会サービスを市民自らが創造し提供することであり、さらに制度や政策づくりにも関わるから、市民の「思い」を「かたち」にする新しい社会システムである。

NPOは、構成員1人1人の自発的な社会参加をもとにそれぞれの価値感によって行動するから、行政のように公平性や政策の一貫性にしぼられることはない。また企業のように利益や、効率といった物差しに左右されることもないから、より機動的に動ける強みがある。

(3) 経営の5要素：従来の経営では、ヒト、モノ、カネを3つの基本としたが、さらに情報と時間が大きな意味を持つようになった。ミュージアムは情報発信源として重要であり、産業支援型NPOはミュージアムの新しい動きを通じて、産業の振興や地域活性につながるものといえる。

このような理念をもったNPO法人「企業ミュージアムの協会」は、「文化・教育・生活に向上の輪を」をスローガンとして、「①生涯学習、②子供の健全育成（総合学習）、③地域文化の振興に貢献すること」を目指して活動を行っている。

(4) 事例に見るNPOを生かしたミュージアムの運営例：

「おまけやZUNZO」グリコのおまけデザイナーであった宮本順三氏の個人的なおもちゃミュージアムから、企業ミュージアムへと脱皮を図ったが、これに際し、固定資産は個人のものとして確保し、マネジメントはNPOに任せるとの形式をとった。

「関西フィルハーモニー管弦楽団」1企業のメセナによる運営から、資金、労働力ともボランティア活動によって成り立つNPOへと組織変えされた。

「紙の博物館」ショップのグッズとして好評な“紙すきくん”は、牛乳パックを再利用して、紙を作るセットだが、これはすべてボランティアの手作りによるものである。

「キッズプラザ大阪」ボランティアを組織的に活用し、各コーナーの運営一切をボランティア200人にまかせている。

「司馬遼太郎記念館」および「大阪企業家ミュージアム」ボランティアの個性と持ち味を館運営に組み込む。「司馬良太郎記念館」は東大阪市がボランティアの管理をしているが、記念館の運営は殆ど司馬遼太郎作品に熱心なボランティアに支えられている。「大阪市企業家ミュージアム」は大阪商工会議所に所属するミュージアムで、大阪の企業家105人の展示を行っている。このミュージアムの活動には、各企業の出身者がボランティアとして参加して、個人の経験を生かした活躍をしている。

(5) NPOの日本におけるこれからの展開：税制の問題は極めて重大で、日本のNPOの成否の帰趨がかかっている。現在日本では、NPOへの寄付行為に対する税制の優遇の特典は全くないのが現状。NPOの存立基盤として、税制の問題は大きい。



亀田氏（左）と井上氏（右）



会場の様子

(6) まとめ：今やヒトの心を重視する時代となった。ミュージアムは人の心を満たし、啓発するものであり、今の時代に最もマッチした文化施設であると言える。ここは情報を提供するのみならず、顧客からの情報が集まる場でもある。このような新しいミュージアムの運営に、個人の善意のもとに活動するNPOの働きは大いに期待されるものである。

質疑応答：亀田氏の講演に対し次のような質問や意見があり、参加者の中で議論がなされた。その話題の主なものには、次のようなものがあった。

- ・行政や企業が博物館経営に向いていないと言われたが、具体的にどういうことか。
- ・博物館経営にNPOが加わるメリットは何か。
- ・民間の力を博物館経営に導入することで、刺激や感動が生まれるとの指摘があったが、これではミュージアムがアミューズメント的に偏り過ぎないだろうか。
- ・NPOと公立博物館の関わりにおいて、行政はNPOを安い労働力ととらえるのではないか心配だが、今後どのような方向に向かうのか。
- ・自治体や国が意図したNPOに、職員が出向する例があるが、そのようなNPOが博物館運営に関わった場合、短期的に見れば効果的だろうが、長期的に見た場合どのようなになるだろうか。
- ・博物館経営にNPOを導入した場合の失敗例はあるだろうか。

研究部会報告
ソフトサービス
研究部会
第2・3回研究会

テーマ：みんなの博物館とミュージアム・マネージメント／地域利用者のコミュニケーションとミュージアム文化の創造—みんなで提案する伊香保温泉ミュージアム・プロジェクト—
 日時：平成15年 8 月23日／平成15年11月15・16日
 場所：乃村工藝社大阪本社／伊香保温泉
 基調講演：諸岡博熊氏（JMMA副会長）、木原勝彬氏（NPO 政策研究所長）（第2回）
 提案者：松本侑起氏（伊香保温泉松本楼）（第3回）
 報告者：塚原 正彦

利用者からのミュージアム概念

平成15年度のソフトサービス研究部会は、①利用者の視点からミュージアム活動に焦点をあてることにより新たなミュージアム概念を提示すること、②新たなミュージアム概念から波及する地域づくりやブランドづくりの基盤となるマネージメントを創造するということを目的に、近畿支部及びミュージアム文化研究部会と共同で、フィールドワークを中心とした研究部会を展開してきた。

1. みんなの博物館とミュージアム・マネージメント (1) 問題意識

近畿支部との合同開催で、8月23日（土）に乃村工藝社 大阪本社において、「みんなの博物館とミュージアム・マネージメント—奈良町（NPOのまちづくり）を参考に新しい博物館概念についてみんなで考えよう—」という合同シンポジウムを開催した。

シンポジウム開催にあたっての問題意識についてふれておこう。

近年、公的な博物館の世界では、国立の博物館や文化施設が独立行政法人化への移行するに伴い、「評価基準」や「あるべきミュージアム像」を模索する試みに関心を集めており、あらためて博物館経営や博物館学の再構築が求められている。しかし、これまでの博物館学や公的博物館からの理解だけでは、とらえきれないような新しい動きも動きはじめている。

たとえば、JMMA第8回大会のシンポジウムでも提起されたようにインターネットショッピングの「楽天市場」や「たそがれ清兵衛の広告」は、ミュージアム概念を視野につくられており、八王子市の「ネイチャーセンター長池」のように市民が学芸員や館長になって運営するミュージアムも登場しはじめている。

このような現実を視野にいれたとき、ミュージアムは、法的規制や館の展示、そこだけの教育普及活動ではとらえられなくなっており、「みんなの博物館」といわれる時代が到来している。

「みんなの博物館」というミュージアム概念を想定するなら、公的博物館を土台に構築されてきた博物館学や博物館の経営評価、博物館の基準に代わる、利用者からの視点からの「みんなの博物館」という新しいマネジメントモデルを構築することが求められてくる。

そこで、このシンポジウムでは、いままで議論を

する際にすでに前提条件で組み立てられてきた、素朴な疑問（「博物館とミュージアム」「経営管理とマネージメント」「博物館と社会」「教育と学習」「サービスとは何か」）について、実践家と理論家をまじえ、理論創造のための意見交換を行った。

(2) 基調講演

シンポジウムのプログラムは、JMMA副会長 諸岡博熊氏による「みんなの博物館—21世紀の博物館概念とミュージアム・マネージメント—」、NPO 政策研究所 木原勝彬から「持続可能な地域づくりのすすめ—奈良町の経験から—」という2本の基調講演を受けて、「みんなの博物館とミュージアム・マネージメント」というテーマで、JMMA 副会長 諸岡博熊、NPO 政策研究所長木原勝彬、JMMA近畿支部長 梶井喜孝、JMMA幹事 塚原正彦によるパネルディスカッションが予定されていた。

残念ながら、当日基調講演を予定していた諸岡氏が急病により参加できず、梶井支部長が諸岡氏に代わって、原稿を代読することとなった。

諸岡氏の講演は、7月に発刊された最新著作『みんなの博物館』（日本地域社会研究所）を中心に、市民参画・民営化時代の開かれた博物館のあり方についての問題提起を中心としたものであった。氏は、日本の博物館の現状について、制度と装置の画一化されたシステムで運営されており、それを変えようとする議論が少ないと分析したうえで、「みんなの博物館」という新たな概念規定の必要性を提起した。

そのうえで、人びとがあつまる博物館、利用者中心の社会博物館の現状と課題、ボランティアの活用、マーケティングの戦略、サービスの手法、運営組織の見直しと人材の育成、エデュテインメント（楽習）、新しい展示手法（オーラルヒストリー）、大阪万博に学ぶマネージメント・ミュージアムなど、博物館概念の拡大と人間性回復の博物館運営についての具体的なノウハウについて詳細な言及がなされた。

木原氏の講演では、はじめに、ミュージアムとしてのまちづくりを起動させ成果をあげた「奈良町のまちづくり」の経験が紹介された。奈良町の経験から、ミュージアム活動を起動させるためには、地域・コミュニティレベルにおけるNPO活動と行政活動、及び企業活動それぞれの関係領域における政策研究と形成、各セクターを超えた政策研究コミュニティを形成することの重要性が指摘された。

(3) 研究課題

以上2本の基調講演を受けて、会場をまじえてパネルディスカッションが行われた。「みんなの博物館」という枠組みから提起されているいくつかのプロジェクトのねらいとそれが構築されるまでの試行錯誤（たとえば、「鳥取県大山ミュージアム」「つくばミュージアム都市構想」など）が紹介され、構想はつくられけれども、それが具体的な成果に結びついていかないマネジメントの困難さが問題提起され、問題解決のために構築しなかなければならない理論的問題についての検討が行われた。

今後の研究課題としては、①博物館法や行政の枠組みにとわれない運営主体としてのNPOの位置づけ、②NPOを主役に据えた新しいミュージアム・マネジメントの創造、③ミュージアム・コンテンツに視点をあてた理論創造の必要性、④地域資源をコーディネートしていくミュージアムプロデューサーの必要性が指摘された。

2. 地域・利用者のコミュニケーションとミュージアム文化の創造

—みんなで提案する伊香保温泉ミュージアム・プロジェクト—

(1) 問題意識

ミュージアム文化研究部会、事業戦略研究部会との合同開催で、11月15日（土）、16日（日）の2日間、群馬県伊香保温泉において「地域・利用者とのコミュニケーションとミュージアム文化の創造」というフィールド調査及び合同研究会を開催した。

フィールド調査、研究会の問題意識を述べると次のようになる。

今日、観光の形態が大きく変わっている。団体客を対象にした宴会プランを中心に組み立ててきた観光地は、苦戦を強いられているその一方で、湯布院や黒川温泉など、地域が一丸になって、顧客サービスに取り組み、知や文化的満足を作り出そうとしている観光地は、驚異の成果をあげている。

観光のキーワードは、「団体→個人」「集客→リピート誘導」「イベント→文化」に変容しており、「ミュージアム概念による地域づくり」「ミュージアム・マネジメント」による取り組みこそが求められている。

そのような時代の流れの中で、「熱海」に次ぐ温泉観光地であった「伊香保温泉」は苦境にたたされているものの、再生への胎動が着実に動きはじめている。

「伊香保温泉松本楼」の若女将で、「洋風旅館ぴのん」の創業でめざましい成果をあげている松本由起氏を筆頭に、若手女性経営者と行政のコラボレーションが起ちあがりはじめており、伊香保らしさを活かした伊香保ブランドづくり、伊香保のリピーター育成を目指した「ミュージアム概念による地域づくり」がスタートしている。

今回の合同研究会では、伊香保を舞台に、地域や

ビジターとのコミュニケーションに視点をあて、「地域まるごとミュージアム」の可能性と展開のための課題を探ることを目的にしたものである。

(2) 研究会の概要

「伊香保温泉をまるごとミュージアム」というコンセプトで取り組んでいる民間、行政による各種のミュージアム・プロジェクトを実際に視察し、ミュージアムとしての伊香保づくりに取り組む人々と意見交換を行った。

15日の午後は、フィールドを舞台に行った研究会では、伊香保町から、松本由起（松本楼若女将）、関靖（伊香保町役場）千明和子（伊香保町旅館組合婦人部長）、野本京子（地域観光ジャーナリスト）が参加され、これまで実施してきた手づくりプロジェクト、「旅館の美術館プロジェクト」、「総合的学習の時間を活用した中学生による地域資源の発掘プロジェクト」「空き店舗のミュージアム的な活用」などの成果と課題について、現地で実際のサービス活動にふれながら、その報告が行われた。

15日の夜は5時間にわたり、洋風旅館「ぴのん」のレストラン「夢見亭」において、「伊香保まるごとミュージアム」を糸口に、「地域まるごとミュージアム」の理論的な可能性を探るとともに、伊香保がこれまで展開してきた一連のミュージアム・プロジェクトを検証しながら、参加者全員で、知恵を持ち寄り、伊香保を元気にする「ミュージアム・プロジェクト」についてアイデア提供を行った。

16日の午前中は、「ミュージアム資源とコンテンツ」「回遊性の景観とイメージづくり」「利用者サービス」という研究テーマに別れ、伊香保の住民をまじえながら、「伊香保のミュージアムづくりに関する評価と未来戦略」について検討し、検討結果についての報告会を行った。

(3) 研究課題

「伊香保ミュージアム・プロジェクト」の評価と今後の提案については、会報で改めて紹介することにする。2日間をとおして得ることのできた問題点としては、次の課題をあげることができる。

(1) ミュージアム資源の活用方法

「みんなの博物館」という枠組みにおいて、ミュージアム資源とは、地域にある博物館がそのものではなく、地域に存在する人、モノ、サービス、歴史、文化、自然など森羅万象のすべてを含む存在である。地域に散在する多様な資源を結びつけて、感動を創造する作業がミュージアム活動である。

これまでの観光は、集客に偏重し、話題性のあるテーマや一過性のイベントに終始してきたきらいがある。それを脱却するためにも、地域の資源を評価し、それを意味のある感動に生まれかわら

すことのできる方法論を研究開発していく必要がある。

- (2) ミュージアム活動そのものが成果—失敗から学ぶ
ミュージアム活動に完成はない。それは、つねに変化し、限りない成長を続けるものである。それは、市民が集い、ミュージアム資源をつくりだしていくダイナミズムである。

ミュージアム活動は、市民参画でつくられるものである以上、最初から完璧なものをうみだしていくことは難しい。当初は失敗することもあるかもしれない。しかし、その失敗から学び活動を継続さえることが重要で、失敗に学ぶこともまた大きな成長の糧になる。

- (3) 若手経営者と学校教育がリードする伊香保の活力
若女将を中心に、それを行政がサポートし、さらには総合的な学習の時間を活用して成果をあげている伊香保の取り組みは、ミュージアム活動としては途上ではあるが、活力があり、今後のさらなる飛躍が期待できる。

平成15年度（2003）における研究部会・支部会報告

平成15年度の「研究部会」及び「支部会」の研究発表活動を一覧表にまとめた。

現在、JMMAには7つの研究部会と6つの支部会があり、それぞれの部会をベースに毎年活発な研究会が実施されている。

JMMAのこうした研究活動は、会員の資質向上や会員間の交流に寄与するだけでなく、ミュージアム文化全体を底上げする力にもなることから、平成16年度も、15年度以上に活発な活動をお願いしたい。

（事務局：高橋信裕 記）

平成15年度研究部会活動報告

研究部会	テーマ	開催日と開催場所	備考
ミュージアム文化研究部会	「コンピュータ・ゲームミュージアム化の可能性を探る」	15年5月17日(土) 立教大学	ソフトサービス研究部会と合同開催
	「森」	15年6月15日(日) 日本科学未来館	光フォーラムと合同開催
	「光」	15年7月21日(月) 日本科学未来館	光フォーラムと合同開催
	「地域・利用者のコミュニケーションとミュージアム文化の創造みんなで提案する伊香保温泉ミュージアム・プロジェクト」	15年11月15日(土)～16日(日) 伊香保温泉 洋風旅館 「びのん」	ソフトサービス研究部会 関東支部会と合同開催
制度問題研究部会	「ミュージアムにおける人材を考える」	15年5月17日(土) 立教大学	
	「博物館が生き抜くための術 ～イギリスの博物館における教育とマーケティング～」	15年10月13日(土) お茶の水女子大学	
	「NPOと博物館」	15年11月22日(土) お茶の水女子大学	
	「博物館経営の実際」	16年2月14日(土) お茶の水女子大学	
理論構築研究部会	「美術館・博物館のミッションをめぐるエトセトラーコミュニケーション・ポリシーとコレクション・マネージメントの日米事情」	15年5月17日(土) 立教大学	事業戦略研究部会と合同開催
	「美術館・博物館における調査・研究のマネージメント」	15年7月5日(土) 科学技術館	
事業戦略研究部会	「美術館・博物館のミッションをめぐるエトセトラーコミュニケーション・ポリシーとコレクション・マネージメントの日米事情」	15年5月17日(土) 立教大学	理論構築研究部会と合同開催
ソフトサービス研究部会	「コンピュータ・ゲームミュージアム化の可能性を探る」	15年5月17日(土) 立教大学	ミュージアム文化研究部会と合同開催
	「みんなの博物館とミュージアム・マネージメントー奈良町（NPOもまちづくり）を参考に新しい博物館概念についてみんなで考えよう」	15年8月23日(土) 乃村工藝社大阪本社	近畿支部会と合同開催
	「地域・利用者のコミュニケーションとミュージアム文化の創造みんなで提案する伊香保温泉ミュージアム・プロジェクト」 「博物館同士のコミュニケーション」	15年11月15日(土)～16日(日) 伊香保温泉 洋風旅館 「びのん」	ミュージアム文化研究部会 関東支部会と合同開催
教育・コミュニケーション研究部会	「博物館同士のコミュニケーション」 「ミュージアムショップにおける教育グッズ展開の可能性～次世代型ミュージアムショップに期待される姿と可能性を考える～」	15年5月17日(土) 立教大学	ミュージアムショップ研究部会と合同開催
ミュージアムショップ研究部会	「博物館同士のコミュニケーション」 「ミュージアムショップにおける教育グッズ展開の可能性～次世代型ミュージアムショップに期待される姿と可能性を考える～」	15年5月17日(土) 立教大学	教育・コミュニケーション研究部会と合同開催

平成15年度支部会活動報告

支部会	テーマ	開催日と開催場所	備考
東北支部会	平成15年度総会	15年9月20日(土) 仙台市戦災復興記念館	
	デジタルアーカイブをどう活かす～これからのミュージアム情報発信～	15年10月31日(金) 仙台サンプラザ	東北デジタルアーカイブ研究会、東北マルチメディア・アプリケーション技術開発推進協議会、アート・ドキュメンテーション研究会等と合同開催
関東支部会	「海外と日本の国公立博物館の経営と評価」	15年10月1日(水) 千葉県立美術館	千葉県立美術館、博物館協議会 博物館評価研究会と合同開催
	「地域・利用者のコミュニケーションとミュージアム文化の創造みんなで提案する伊香保温泉ミュージアム・プロジェクト」	15年11月15日(土)～16日(日)	ミュージアム文化、ソフトサービス研究部会と合同開催
近畿支部会	「みんなの博物館とミュージアム・マネージメントー奈良町（NPOのまちづくり）を参考に新しい博物館概念についてみんなで考えよう」	15年8月23日(土) 大阪歴史博物館	ソフトサービス研究部会と合同開催
中四国支部会	支部設立研究会 「コミュニケーションを創造するミュージアム地域資源を活かした「出会い」の爆発」	15年9月20日(土)～9月21日(日) 新居浜市別子山 「ゆらぎの森」	

「地域博物館学の提唱」 博物館学入門

金山 喜昭 著

発行 慶友社

本体価格…(本体2、800円+税)

ISBN 4-87449-234-7



メインタイトルに付けられた『博物館学入門』と同名の書は、1956年(昭和31年)に「日本博物館協会編」として上梓されており、今日では博物館関連図書の名著の一つとして知られている。それからおよそ50年を経た今、一人の博物館学者によって同名の本書が出版された。その著者が、法政大学で教鞭を執っていることに、縁というものを感じさせる。日本博物館協会編の『博物館学入門』は、当時同協会の理事で、後年法政大学で博物館学の講座を指導した鶴田総一郎氏を中心になって編まれたものだからである。

新しく編まれた『博物館学入門』は、こうした先達たちの「博物館学」に対して新たなテーマを求めたものである。従来の「博物館学」は、博物館の解釈論議に軸足がおかれており、同時代を生きる人々の問題解決に貢献、寄与できるものとなっていない、という現状を自ら18年間務め上げてきた地域博物館の学芸員の経験から説き明かしており、今日の「博物館学」は「博物館」から見えてくる現実の変化を、しっかりと受け止めるべきであると主張する。

すなわち、経済的な停滞に起因する心理不安が、学ぶ意欲を削ぎ落としており、「学び」意欲の低下は、種々の問題を解決するのに大きな障害となり、「学び」への積極的な取り組みと構築こそが社会の活性化を促すということ。また、その「学び」意欲を再興、再生するには、地域の経済を活性化することが求められ、地域活力の閉塞状況を打破する社会的な公器として「博物館」が機能するべきである、との考えから、本書が説く主要なテーマが「博物館の社会性と現代的な視座に立つ博物館学のあり方を再構築すること」(「序」なぜ地域博物館学なのか)より)に置かれている。つまり、筆者の主張は、現代社会が当面する現実の課題に対して改革や解決の力となり得ない「博物館」は、社会性を備えていない、という事であり、成果や効果が顕在化した形で、市民社会の中で評価される活動こそが、今最も「博物館」や「博物館学」に求められている、という点にある。

会との関わり方が、それぞれ多様な目的や使命をもちながら、利用者サービスが画一的に提供され、それぞれの特性や需要に見合った活用方法が図られていない現状に疑問をもち、より利用者の求めに応じた「博物館像」を実現するために、機能分け(分節化)を主張し、同時に地域住民との協働による運営体制の構築を唱える。

本書で提唱される「地域博物館学」は、博物館と地域課題との関係を実際の博物館史を通して実証しようとする「地域博物館史論」と、博物館活動を組織の構造や体制の強化、充実面から取り組むべきとした「地域博物館構造論」の2つの視点からまとめようと試みられているが、博物館関係者(学芸員)や学生などの「入門書」としての利用も図られるよう配慮されている。

「博物館」の分節化と「博物館」の主体者を地域住民に求めることで、筆者の「博物館学」は「地域」に集約され、この一種の博物館再生運動ともいえる考え方は「地域博物館学」として、筆者が勤めた千葉県野田市郷土博物館での学芸員実務経験とフィールドワークで実証されている。

「鶴田博物館学入門」から約50年を経た今、「金山博物館学入門」が、先達の鶴田総一郎氏が教鞭を執った同じ大学で、ひも解かれ、講義される様子を想像するだけでも、「博物館」がおかれている時代環境の違いと時の大きな流れを感じさせる。

(文責 JMMA事務局 高橋信裕)

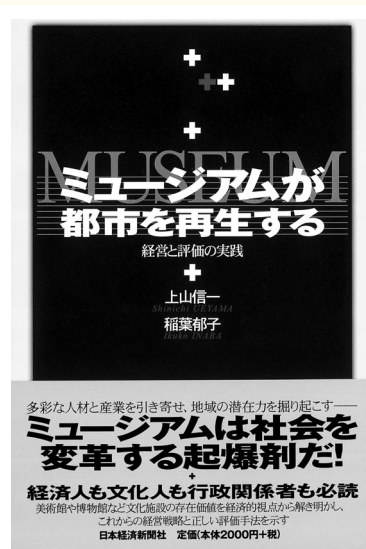
「ミュージアムが都市を再生する」 経営と評価の実践

上山 信一・稲葉 郁子 著

発行…日本経済新聞社刊

本体価格…(本体2,000円+税)

ISBN…4-532-31092-X



ミュージアムを書名に冠した本が続けて刊行されている。「ミュージアムの思想」宮松秀治著(白水社)、「ミュージアムの政治学」溝上智恵子著(東海大学出版)、そして「ミュージアムが都市を再生する—経営と評価の実践」である。著者の一人、上山 信一氏は本学会会員でもあり、先般、理論構築研究部会において、また関東支部・千葉県立博物館美術館協議会共催の研究会においても講演をお願いした顔なじみでもある。

この本はタイトルが示すとおりミュージアムと都市の関係を経営論の観点から取り上げたものである。

町づくりとミュージアムを文化から取り上げた研究はなされているが、著者は都市の中にミ

ュージアムがあるというよりも、これからはミュージアムが都市を変えていく時代である。

またかつては、経済が主体で稼ぎ、文化は出費の対象であつて、ミュージアムはお金を超越した存在でありえたが、もうその時代は終わり、文化と経済が共生する時代になつてきたと言

う。ミュージアムの経済価値を3段階のレベルで分析している。第1段階は入館料など博物館単体の収支である。第2段階はミュージアムが所在する都市への来訪者とか納入業者へ落とすお金に係る地元経済効果。第3段階はミュージアムから生まれるファッションやハイテクなどの知的プロフェッショナル産業を創造し、都市全体の経済効果を生んでいく。ミュージアムは金喰い虫であるなどと決めつけずに、芸術文化と都市経済の創造性に着目した都市再生論を展開させている。

第二・三章において、金融経済の中心都市であつたニューヨークを事例に捉えて都市再生の仕組みを具体的に例示している。第四章では然らばわが国のミュージアムはどうかをその量と質の上から現状評価する。今、日本の政治経済が大変革期の中にあつて、ミュージアムが未だかつてない危機乃至は改革期に直面していて、可視的にも、水面下でも幾多の難しい課題を抱えていることを指摘する。

第五・六章で、その課題への挑戦の処方とも言うべきミュージアムと経営の本質論が続く。産業分類の観点からは、ミュージアムはデパートやホテルのような装置産業に類し、流行に依存するファッション系の産業であり、カストマーとクライアントが一致しないメディア産業であり、そして公共サービス事業でもある。かくも難しい産業のマネージメントをいったい誰がどうやって取り組んでいくのか、ひと・も

の・金・システム等の面から論じており興味ある示唆が列挙されている。第七章はここそこで関心と話題の中心となつている評価論を事例とともに展開している。もともと著者は、行政側の管理手法である事務事業評価の導入時からの理論構築の立役者であつて、このことに関しては別に「自治体再生戦略」の共著がある。

ここまで読み進めると、ミュージアム再生に真剣に取り組んでおられる方々は一体どこから、どのように挑戦したらよいか息がつまりそうになるのではなからうか。そのためか、最終章には改革のメニューの項が用意されている。曰く、「志は高く、洞察は深くもつ。しかし目の前の課題からは目をそらさず、きちんとこなして行く。その中に大局観を織り込んで行ってこそ道は開ける。すなわち着眼大局、着手小局である。」と言う。何が大局であり、小局とは何かは本書を手にとってご覧いただきたい。

著者が言うように、これまでは海外や先進ミュージアムの例を真似ていてもよかったかも知れないが、今後は、それぞれのミュージアムが独自の創造性の発揮を求められる時代である。ミュージアムの危機が言われるが、問題はミュージアムの容れ物にあるのではなく、中身にある。その中身を生かすための経営の問題を解く責任がわれわれに問われているのである。ひいてはミュージアムを支え、必要としている社会や市民の側にもその責があると考えられる。

博物館実務面にも理解ある共著者稲葉郁子氏との連携も見事であり、本来なら学会の使命の一つである社会への提言を代弁しているような含蓄ある啓蒙の書である。

(文責 原 秀太郎)

掲示板

●土屋周三会員（小樽市博物館館長）、ニュージーランド・オーダー・メリット勲章を受章

JMMA会員（理事／北海道支部長）で小樽市博物館館長の土屋周三氏がニュージーランド・オーダー・メリット勲章を受章されました。メリット勲章は、文化に貢献された人々を対象として設けられているもので日本人では6人目、日本の博物館関係者では初めての受章です。

土屋氏は、1990年より同国における日本関係資料の調査に関わり、「ニュージーランドと日本との文化的交流に対する貢献」を評価されての受章となりました。

小樽市は、ニュージーランドの主要都市ダニーデン市と姉妹都市の関係にあり、ダニーデン市の博物館、美術館、大学等に数多くの日本関連の資料が収蔵されていたことから、その調査依頼があり1990年を皮切りに、これまで10度の調査が行われてきました。国内では東京大学、共立大学、五島美術館、サントリー美術館、日本刀剣美術協会などが協力し、調査団に加わっています。

授与式は4月1日、首都ウェリントンの総督府官邸で行われる予定です。

●NPO法人「企業ミュージアムの協会」からのお知らせです。当協会は、JMMA会員の亀田訓生氏が理事長を務める団体で、“文化・教育・生活に向上の輪を”をスローガンに、①生涯学習、②子どもの健全育成、③地域文化の振興に貢献することを目指し、設立以来さまざまな取り組みを行ってきています。本年が協会発足後、5周年に当たり、その記念事業として以下の企画が計画されています。

I. 発足5周年記念「企業ミュージアム人気グッズコンテスト入賞品特別展」実現のためのアイデア募集！

「企業ミュージアム人気グッズコンテスト」は2001年にはじめて以来、各方面からご好評をいただいているものです。第1回から第3回の入賞グッズ34点と関連資料（説明書・各館案内書・選定記録・写真・ビデオ・ポスター・新聞雑誌放送資料等）を一堂に集めた記念特別展『入賞グッズ記念特別展』を、東京を中心とした首都圏、大阪を中心とした近畿圏、名古屋を中心とした中部圏において開催するため、その開催を実現する具体的なアイデアを広く公募いたします。

<応募資格> どなたでも応募できます。個人、法人（企業ミュージアム、公共（私）施設・諸機関、会社など）を問いません。

<応募締め切り> 2004年4月10日

<応募用紙> 紙（記録用紙、ハガキ、便箋など自由）に記載して、郵送、FAX、宅配便にてお送り下さい。（但し、Eメールでの受付は、整理の都合上致しておりません）

<応募要領> ご記入いただく項目内容。

- (1) 開催場所
- (2) 開催主体者（社）
- (3) 展示期間（原則1週間とします）
- (4) 開催目的
- (5) 関連企画・行事など
- (6) 当協会では入賞グッズ全34点（別紙参照）と表彰状、表彰盾、関連資料、写真、表彰式収録VTR等の現物の貸し出しのみの提供をいたします。
- (7) 経費負担者（社）、凡その経費総額
- (8) 運営者
- (9) 動員、告知方法
- (10) 記念特別展開催期限2004年4月10日～2004年12月31日

<入選特典> 応募されたアイデアのうち、3点以上を採用いたします。その各々に表彰状と記念品とガイドブック『企業ミュージアム』（第7版）および表彰記念写真を贈呈。

<表彰> アイデア入選者には、そのアイデアが生かされ、実施された記念特別展「入賞グッズ特別

展」の会場において、その開催初日に表彰を行い、理事長から贈賞いたします。

<選定審査> 当協会理事会にて最終審査決定いたします。

<結果発表> 2004年4月下旬、ハガキで応募者に通知するとともに報道発表いたします。

<応募送付先および問合せ先>

NPO法人「企業ミュージアムの協会」 事務局 TEL&FAX06-6872-0969

〒565-0855 吹田市佐竹台3-8-3

Ⅱ. 企業ミュージアム人気グッズコンテストBEST10賞第4回募集始まる

好評だった第3回(昨年)に引き続き、第4回コンテストを開催いたします。第1回から3回では、実にユニークで創意工夫にあふれた作品が選ばれました。今回は当協会の5周年にあたることでもあり、すぐれたアイデアとともに、一層巾の広い多数の方々に応募を期待しています。

応募は自薦他薦を問わず、どなたでも応募いただけます。もちろん企業関係者やミュージアム関連業者も応募できます(法人、個人も問いません)。応募方法は、紙(記録用紙、ハガキ、便箋など自由)に記載して、郵送、FAX、宅配便にてお送り下さい。(但し、Eメールでの受付は致しておりません)。

<募集期間> 2004年1月7日～5月7日(金)

<応募時記載いただく内容>

- (1) 応募者のお名前・住所・郵便番号・電話番号・FAX番号
- (2) 推薦するミュージアムのグッズの名称と販売価格
- (3) 当該ミュージアム(博物館・美術館・記念館等)の名称
- (4) 推薦の理由(ユニークさ、アイデアのすぐれているポイント、人気の秘密等)
- (5) できればミュージアムグッズ現品を添えて送ってください。但し返却希望の場合は、返却希望と記入してください。

<結果発表>

当協会理事会最終審査決定後、5月下旬に、入賞者に文書で通知します。

<受賞特典>

- ・応募企業ミュージアムのうち入賞ベスト10館には、賞状・賞盾・賞金1万円を各々贈呈する。
- ・一般応募者のうち、入賞ミュージアムグッズを推薦いただいた方(推薦者多数の場合は1点につき5名の方を抽選で選定する)には、記念品(ミュージアムグッズ)を贈呈する。

<応募送付先および問合せ先>

Iに同じ。

i n f o r m a t i o n

◆平成16年度日本ミュージアム・マネジメント学会第9回大会の要項（案）◆

日 程：平成16年 5月15日（土）～16日（日）

大会テーマ：ミュージアム・コミュニケーション

会 場：日本科学未来館

プログラム：

【第1日目】 5月15日（土）

10：30～12：00 理事会
 13：00～13：50 総会・学会賞授与式
 14：00～15：20 特別講演 瀬名 秀明氏
 15：30～16：00 特別演奏 モンゴル国立民俗音楽団
 16：10～18：10 研究部会の開催
 18：30～20：00 懇親会

【第2日目】 5月16日（日）

9：30～11：45 会員研究発表
 11：45～12：00 研究部会・支部会報告
 12：00～12：10 閉会式
 13：00～ アフタヌーンミュージアム

★大会の研究発表者を募集いたします。発表申し込みは4月26日（月）までに事務局までお申し込みください。大会テーマ「ミュージアム・コミュニケーション」を念頭において発表していただきます。研究発表は、発表人数に制限がございますので、あらかじめ発表要旨を提出していただき、あらためてこちらから発表をお願いすることになります。お申し込み、お問い合わせは事務局まで。

◆文献寄贈のお知らせ◆

以下のように文献を寄贈していただきました。（平成16年1月1日～2月29日）

- ・「動物観研究 No.7」
動物園研究会

u o i t e w i o j u !

◆年会費納入のお願い◆

会費未納の方は下記口座までお早めに納入くださいますようお願い致します。

請求書・領収書等が必要な方は事務局までご連絡下さい。

なお、個人会員の皆様は、トラブル防止のため、お振込みの際は必ずご登録者のお名前を明記のうえ、ご入金下さい。

郵便局の場合	口座番号00160-9-123703 「日本ミュージアム・マネージメント学会」
銀行の場合	みずほ銀行 鶯谷支店 普通預金 No.1740890 「日本ミュージアム・マネージメント学会」

u o i t e w i o j u !

新規入会者のご紹介

【個人会員】

白 井 邦 彦	松本市役所
小 山 晴 美	The Steyning Museum
野 呂 淳 子	
村 田 哲 朗	郡山女子大学
村 田 章 人	埼玉県教育委員会

【学生会員】

長 田 純 佳	京都橘女子大学大学院
杉 本 豪	YORK Univ., Master Course

(五十音順・敬称略)

JMMA会報 No. 32 (Vol. 8 No. 4)

発行日 2004年 3 月31日

事務局 〒108-0023 東京都港区芝浦 4-6-4 トウセン芝浦ビル 2F TEL/FAX 03-3455-1505